
不器用な俺。

sprint

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不器用な俺。

【Nコード】

N5685D

【作者名】

sprint

【あらすじ】

恋愛にはあまり興味は無かった陸上部の部長・竜二。だが、そんな竜二も最近一人の後輩の事が気になっていた。どうにかしたいけど、どうしたら良いのかわからない。そんな気持ちをどうするのか・？

ブローグ

俺はいつもと同じようにベッドで考え事をしていた。
寝る前にはなぜか考え事をしている。

俺の名前は斉藤竜二。

中学二年で陸上部に入っている。

自慢じゃないが県大会にも何度か出場した。

だから先輩や先生に期待の眼差しを向けられ、部長になってしまったのである。

俺は人の前に立って進んで動く、という事が一番苦手なのに……。最初に推薦された時点で断れば良いものを成り行きで引き受けてしまった。

そう。俺は昔から頼まれたら断れない性格だった。

この性格のせいでいつも貧乏くじを引いている。
小学校のころから掃除当番や給食当番を頼まれるのは毎度のことだった。

学級委員もやったしうさぎの世話までやった。

別にパシられているわけでは無いが友達に頼まれるとどうしても断れない。

今、一番悩んでいる事かもしれないな。

いや？ 二番目か？

俺にもこの性格以上に悩んでいる事があった。

同じ部活の後輩である笹山香織という女子の事がすごく気になっているのだ。

笹山はとても明るく、活発で細かい所に気配りが出来るいい子だ。だが責任感が強すぎて問題を一人で背負い込んでしまう所もある。以前、彼女の悩みを聞いた事があった。

しかし、途中で泣き出してしまい俺はあたふたしながらなだめるだけだった。

自分でも情けない話だと思う。

彼女は容姿も良く、ほったのちよこしたことしたニキビが可愛い。しい。

セミロングの髪の毛をいつもきちつと結んでいる、いかにもモテるだろう！って子。

前まではちよっかいかけてくる後輩、としか思わなかったのだが・・・。

そもそも俺は走る事ばかりでこちらの方面には疎かったため、昨日姉貴に相談してみた。

「竜」。それってその子の事、好きなんじゃないの？ ってか絶対そうだって！ 頑張れ」

と、軽く流されてしまった。

こんな大事な時に役に立たない姉貴め・・・。
でも少しだけわかった気がする。

俺は・・・笹山の事が好き・・・？

笹山はただの後輩じゃないのか？

気づくと目で追っていたり他の男子部員と話しているとなんとも言えない気持ちに襲われる。

姉貴いわく、この気持ちは「嫉妬」らしい。

そんな事言われてもわかんない。

もう寝てしまおう。明日も朝練あるんだし。

俺は目を閉じるとすぐに眠ってしまった。

次の日。

チュンチュンと雀が鳴き朝日が窓から入ってくる。

いつも設定している携帯電話のアラームで俺は目覚めた。

寝ぼけ眼で顔を洗い、朝食のパンを少しかじって歯を磨くとすぐにシューズを持ち出発した。

「いつてきまーす！」

アラームを鳴らす時間を間違えたため少し遅刻気味だった。

部長が遅れてしまったらまずい、と思ったが持ち前の足の速さでなんとかセーフ。

俺が肩で息をしていると一人の後輩が近づいて来た。

「先輩！ 遅刻ギリギリじゃないですかあゝ。また遅くまで考え事してたんですか？」

あの笹山だった。

走ってきたので胸の鼓動は元々激しかったが、なぜだか余計に早くなる。

こいつの目を見てると吸い込まれそうな感覚に陥る。

目を合わせている事が出来ず、つい視線を逸らしてしまう。

「あ！ 目逸らしましたねえ？ 凶星だあ！」

「今日は携帯のアラームが・・・。」

「言い訳禁止！ さ、もう時間ですよ？ 大会は来週なんですから早く練習しましょ！」

確かに大会まであと少しだ。けど理由くらい言わせてくれても・・・。まあ細かい事は気にしないようにしよう。

「練習始めます。」

この掛け声とともに今日もまた部活が始まる・・・。

この時はまだ部活が終わった後、あんな事になるなんて思いもしなかった。

第一話：練習、そして発覚。（前書き）

よくわからない気持ちの事を姉に相談すると、竜二は同じ部活の後輩である「笹山香織」の事が好きなのだと姉に言われ、戸惑う。そんな中いつものように部活が始まるが・・・。

第一話：練習、そして発覚。

今日は何をしようか。

部活が始まり、俺はメニューを考えながら走っていた。

俺たちの部活の顧問の先生は立派な人だが進路事務のため来れる事が少ない。

隣から副部長の片桐翼が話しかけてくる。

「竜二。今日はどうする？」

「ああ、今考えてた。大会前だし軽めにスタートダッシュにしようか？」

「そうか。キツくして怪我されたら困るしな。」

翼は俺がとても信賴している俗に言う「親友」という存在だ。

成績が良く、俺が最も苦手としている数学でいつも90点台を取っている強者。

また普段はメガネをかけていてガリ勉に見えるがそこまで堅苦しい奴ではない。

俺よりも顔は良い方で何回か告白もされているらしい。

こいつも足が速く、種目は違えど俺と一緒に何度か県大会に出場している。

そうこうしているうちにアップが終わった。

久々に50mでも計測してみようか。

一年生に計測してもらおうと思い、適役を探す。

やっぱり笹山かな・・・？

あいつ、ちょっと抜けてるように見えて意外と几帳面だし。

別に笹山ばかりを贖っているつもりは無いが自然とあいつが思い浮かぶ。

「笹山ー。50mやるからタイム計って!」

「はい! 部長はまた片桐先輩と計るんですか?」

「うん。あいつには負けられないからね。」

「そうですか。頑張ってくださいね! じゃ、準備します。」

何気ない会話なのに胸がドキドキして、手に汗まで掻いている。
後輩相手になぜこんなに緊張しているのだろうか……?

これが「好き」って事なのか?

つて……今は練習に集中しないと。

元々負けず嫌いな俺だったが笹山が応援している、というのもあり
余計に負けるわけにはいかなかった。

他の一年生にスターターを任せ、翼と一緒にスタートに着く。

「位置について……よい。」

「パン!!」

ほぼ二人同時にスタート。

前傾姿勢をとり、徐々に上体を起こしていく。

そして加速。

30m、40m過ぎても隣り合っただまだ。

周りの景色や人がすぐ後ろへ過ぎてゆき、どんどんゴールへと迫ってゆく。

ただひたすらにゴールを目指して走る、俺はこの爽快感が好きなんだ。

そしてゴール。

するとすぐに笹山が駆け寄ってきた。

「先輩やっぱ速いですね！ほとんど同着でしたよ！」
俺に言っているのか翼に言っているのかはわからなかったが翼が口を開く。

「ふう。で、笹山。何秒だった？」

「あ、すみません。えっと斉藤先輩が6'36で片桐先輩が6'38です。」

おお。勝った。やった！

「ああ。負けちまったかあ。竜二、さすがだな。」

「よし！勝った！けど翼はやっぱ速いなあ！」

その後、何本も走ったが俺は負ける事は無かった。

やがて部活の時間は終わり下校時刻になる。

俺はいつも翼と一緒に帰っているので今日も翼と返る事にした。
すると唐突に翼の口から思いがけない言葉が・・・。

「なあ、竜二。笹山って、可愛いよな？ プロフィールとか見ても
可愛らしいし。」

一瞬、言葉を失ってしまった。

「え？・・・さあ。ってか、プロフィール？」

「ああ。最近はやってるんだってさ。女子だけでなく男子にも。
」

と言って差し出されたのはホームページのURLだった。

「これがそうなのか？」

「まあ、見てみたら？ 竜二の携帯でも見れると思うから。」

「ありがと。帰ったら見てみるよ。」

笹山のプロフィール、か。

・・・気になる。

けど、なんだ？ この気持ちは。

翼が「可愛い」って言うてから心にグサッと来たって言うのかなん
というか。

これも姉貴の言うように「嫉妬」なのか？

こんな話をしながら二人は帰路に着いた。

「ただいま。」

俺は家に着くとすぐさま自分の携帯電話を取り出した。

翼からもらった紙に書いてあるURLを携帯に打ち込むと画面を開

く。

「これが・・・プロフィール？」

俺はつい、画面を食い入るように見つめていた。
確かに可愛らしい。

顔文字や絵文字がところどころに散りばめられているが適度な数で見やすい。

画面をスクロールしていくとこんな項目が。

「好きな人はのタイプは？」

物凄く気になる。けど見ちゃいけない気がする。

ゆっくりゆっくりとスクロールしていくと画面に表示されていく。

「やっぱり背高くて優しい人かな？　けど、優しいだけじゃなくちよっと冷たい。みたいな？」

もう正直に言っちゃうと同学年に好きな人いるなあ。」

啞然とした。ただただ驚いた。

なぜだか胸が締め付けられ、肩の力が一気に抜けていく。急に涙を流して泣きたい衝動にも駆られた。

だがそれを堪え、冷静に考えようとする。

落ち着け、俺。

なぜだ？ 女の子なんだし好きな人がいたって普通の事じゃないか。ネット上に本当の事なんて書くはずないだろ？
いつもの俺なら「へえ」くらいに流していたはずだ。

なのになんで俺はこんなに悲しんでいるんだ？
どうしてこんなに切ない気持ちになるんだ？

俺は・・・笹山の事が本当に「好き」だったのか・・・。

これが・・・今までわからなかった俺の本当の気持ち・・・？

第二話：相談（前書き）

翼から教えてもらったURLを元に竜二は香織のプロフィールへと辿り着く。

しかしそこで見たものは香織には同級生に好きな人がいるという事実だった。

せっかく香織の事が好きだと気づいたのにどん底に落とされた気持ちの竜二は姉にこの事を相談する・・・。

第二話：相談

俺は携帯の画面を見ながらしばらくボーっとしていた。まるで見てはいけないものを見てしまったような気持ちで。なんでもっと早く自分の気持ちに気づけなかったんだ……。そんな後悔ばかりが押し寄せてくる。自分ではどうしようもないこの気持ち。

また姉貴に相談してみようかな・・・

「竜二！ ごはん！ 何度言えばわかるのっ?！」
母さんが怒り気味に言っている。
まずい、全然聞こえなかった。

「今、行くー。」
適当に返事をする、急いで食卓へ向かう。
夕飯を食べ終わったら姉貴に言ってみよう。

夕飯は俺の好物のハンバーグステーキだった。
いつもならすぐにむさぼりつくはずだったが、なぜか食欲が無い。
適当に食事をすませ、風呂に入ると姉貴の部屋へ行った。

ドアを軽くノックする。

「姉ちゃん？ また相談したいんだけど・・・いい？」

「いいよ。入ってきな？」

部屋に入ると携帯をいじっていたがそれを置いて話し始めた。

「どうしたの？ 暗い顔して・・・。そこ座って良いから、話してみな？」

「ありがと。この前、相談した後輩の事なんだけど。」

「あの笹山って子ね。あの子がどうかしたの？」

「ちよっとこれ、見て？」

俺はおもむろに携帯を取り出すと先ほどまで見ていた画面を姉貴にも見せる。

「これってプロフじゃん！ 竜の？ 結構可愛いじゃん！」

「俺のじゃなくて！・・・笹山の。翼に教えてもらった。」

「あの子のかあ！ で、これがどうしたの？」

「まあ、下まで見てよ。」

姉貴は画面をスクロールして、「あの項目」を見つけた。

「好きな人のタイプってあるじゃん！ どれどれ・・・。

背高くて優しいけど、たまにちよっと冷たい。こんなギャップいいよね」

「もうちよっとスクロールしてみて。」

「ん？ 正直に言っちゃうと同学年に好きな人いるなあ・・・か。竜、これ見て凹んでたのね。」

そう言われると少し胸が痛んだ。

俺は何も言う事が出来ず、ただ俯くだけだった。

少しの間、部屋の中に沈黙が漂う。

「・・・でもね、竜。ちよっと良い？」

姉貴が優しい口調でかつ真剣な眼差しで閉ざしていた口を開く。俯いてた顔を上げ、姉貴の目を見た。

「好きになった子に好きな子がいたらすぐに諦めちゃうの？ それ

で簡単に諦めきれんの？

竜がそれでいいなら良いと思うよ。けど私は絶対に後悔すると思う。だって告白もしていないじゃん。その子の事が好きって気づけたのも最近でしょ？

そんなの絶対もったいないよ。」

一呼吸置くと姉貴は話を続ける。

「私だって好きな人に好きな人がいるって知ってたけど、告白した絶対フラれる！って覚悟してたからすごく怖かった。だけど結果はOKだったんだよ。

後で聞いてみると途中から最初好きだった子より私の方が気になりだしたんだって。

こんな風に人の気持ちはいつ、どう変わるかわからないの。だからすぐに諦めるのはまだ早いと思うよ？」

姉貴は話し終わると優しく微笑んでいた。

今までに見た事ないくらい優しい笑顔で俺のことを見つめている。

最後まで話を聞くと自然に涙が一粒、二粒と頬を伝わり床に落ちた。泣くつもりなんて無かったのに・・・。

今の言葉が心の中で音楽をリピートしているように何度も何度も繰り返され、頬を伝う涙が増える。

必死に涙を堪えようとするがまったく堪えることが出来ない。

むしろ、堪えようとすればするほど涙が流れてくる。

まるで涙を調節する蛇口が破裂してしまったかのように・・・。

俺は・・・こんなに笹山の事が好きだったのか・・・。

そんな事を思っているうちに俺の顔は涙でクシャクシャになっていた。

だが、そんな事はお構いなしとでも言うかのように涙は止め処なく流れる。

すると姉貴がまた話し始めた。

「切ないよね。辛いよね。すごくよくわかるよ。

・・・私もそうだったから。」

もう一度、姉貴の真剣な目を見る。

「でもね、竜。よく聞いて？

キツイ事言うかもしれないけど、今の竜は転んで立ち上がれずに泣いている子供と同じ。

けど、転んだ子だっていつまでも立ち上がれないわけじゃない。

傷口は痛いかもしれないけれど、頑張って立ち上がるうとするでしよう？

そして立ち上がった子はもしかかもしれないけど前の自分より強くなっているはず。

お母さんの手を借りてようやく立ち上がる子とは違ってね。

恋愛もそれと同じ。」

俺の目から涙が止まる事はなかったが、俺は姉貴の話を黙って聞い

ていた。

「好きな人の好きな人、っていう石につまづいているだけ。竜はその石につまづいたまま泣いているの？」

立ち上がろう、って努力せずに誰かが助けてくれるまで待ってるの？」

「・・・だ」

「ん？」

「嫌だ・・・こんな何もせずに終わっちゃうなんて嫌だ・・・。」

何と言っているかわかりにくかったと思うが姉貴はちゃんと答えてくれた。

「そうでしょ？　だったら行動しなきゃ。

告白するなりアピールするなりね？」

「わかった・・・姉ちゃん、ありがとう・・・」

「いいの。ただし、焦り過ぎないようにね？」

「一応大会前なんでしょ？　告白するにしても大会が終わってからの方が良いと思うな。」

「うん、大会終わったらあいつに告白してみる・・・」

「頑張つてね、応援してるから！　失恋したって私が慰めてあげる。相談にもまた乗ってあげるから。ほら、もう泣かないの！　男の子でしょ？」

姉貴は優しくそう言うとも何も言わずティッシュを差し出してくれた。

そうだ。泣いてたって何も始まらないんだ。

それにこんなところ、カッコ悪すぎて見せられないし。

立ち上がらないとな。

俺はそう心に言い聞かせ、立ち上がると姉貴の部屋を後にしようとする。

その瞬間、俺の携帯電話が鳴り響いた。

第三話：何の知らせ？（前書き）

香織には好きな人がいる。そんな事を知ってしまった竜二。

この事を姉に相談すると優しく励まされる。そんな時、竜二の携帯電話が鳴り響くが・・・？

第三話：何の知らせ？

携帯電話が鳴り続けている。

俺はうつとおしく感じつつもその場で携帯を開く。

メールが来てる。

・・・笹山からだ。

気づかなかったが翼からのメールもあった。

（翼のメールから見てるか。）

そう思い翼のメールを開く。

「明後日って部活休みじゃん？　笹山と一年生の女子に遊びに行こうって誘われてるんだけど・・・竜二も行く？」

という内容だった。

悩む・・・。

笹山もいるんだよな。

横で姉貴が笑いながらいつもの口調で言う。

「竜、チャンスチャンス！ さっそくアピールできるじゃん！ 即OKだって！」

先ほどまでの真剣な眼差しはどこへいったのやら。
まあ、感謝してるからいいんだけど・・・。

問題はこっちだ。

・・・笹山からのメール。

ふとしたきっかけでメアド交換はしていたが用事がある時以外にはメールしないようにしていた。

変に送りすぎて嫌われたら嫌だったし。

こっちから送るにしても話題が思いつかなかった。

とりあえず見てみよう。

「片桐先輩からのメール見ましたか？ 明後日なんですけど・・・。
よければ先輩も一緒に！」

夕飯の時には携帯はリビングにおいてあったっけ？

そんな事はいい。

急いで明後日の予定を確認する。

（えーっと。何もない、かな？）

「何もないじゃん！ 絶対行った方が良いつて！ どうでもいい人ならわざわざ誘わないよ？」

（それもそうか・・・。やっぱり行ってみようかな。）

「そつか。とりあえず行ってみるよ。」

翼と笹山にOKの返事を出す。

「よし！ まあ、今日はもう遅いし寝たら？」

時計を見ると12時半を回っていた。

「もうこんな時間か……。寝るよ。おやすみ。」

「おやすみ〜。」

「……………竜二。頑張つてね。」

そう聞こえた気がした。

眠かったので早めに自分の部屋へ戻る。

部屋に入り携帯を机に置くとすぐにベッドに横たわる。

もうさつきまでの泣き顔は消え、いつの間にか頬は緩みっぱなしだった。

にやけながら目を瞑る姿は旗から見るとかなり気持ち悪かっただろう。

そんな事を考えつつ明後日の事も考えていると、眠りについた。

夜はすぐに明け、やがて太陽が顔を現す。

朝。誰かがバタバタと動き回る音が聞こえた。

（うるせえなあ。朝くらい静かにしろよ・・・って今、何時だ？）

俺は寝ぼけ眼で時計を見る。

8時20分。

よく考えたら今日は土曜日じゃないか。

もう一度寝ようと思ったが、ふとあることを思い出す。

（明日は土曜日ですが朝から練習があります。遅れないように！）

昨日、俺自身がみんなに連絡したんだ。

集合時間は8時30分。

かなりまずい！

慌てて着替えを済ませると食卓へ向かう。

「なんでこんなギリギリまで起こしてくれなかったんだよ！？」

母さんに意味の無い抗議をする。

「何言ってるの？ 自分で起きないのが悪いんでしょ？！ 目覚まし

鳴ってたじゃない！」

当然の反論だ。

でもなんか腑に落ちない。

学生がいる家ではよくある事だろう。

しかしこんな事を考えている時間はない。

そうこうしている間に5分が過ぎてしまった。

よくよく考えたら今日は顧問が来る日だ。

（あの人怒ると怖いからなあ・・・）

そう思いつつダッシュで学校へと向かう。
学校へ向かうまでの間、レポートが使えればなぁと真剣に考えていた。
遅刻しそうになった経験のある人ならば一度は思った事があるだろう。

今日ばかりは自慢の足でも間に合わなかった。

普段3〜40分以上かけて通っている道を荷物を持ちながら5分以内に着くなんてほぼ無理だろう。

急いでグラウンドに入るともう顧問は来ていて部活も始まっていた。早めに荷物を降ろすと、顧問の怒声が耳に入る。

「斉藤！ 部長が遅刻してんじゃないえ！ 自覚あんのか？！」

「すみませんでした！」

「さっさと入れ！」

「はいっ！！」

俺は深く頭を下げると慌てて皆の中に加わる。

翼が多少冷ややかな目線で話しかけてきた。

「竜二、またかよ。昨日もギリギリだろ。最近どうしたんだよ？」

「悪い悪い！ ちょっと昨日は色々あつてな……。」

「はい、言い訳禁止！ きちんと引つ張ってくれよ。」
「はいはい、わかったわかった。」

適当に受け答えると俺は先頭に立った。

（あれ？ この台詞どつかで聞いたような・・・？）
ふとそう思い何気なく後ろを振り向くと笹山がクスクスと笑っている。

やっぱり可愛いなあ～と思っていると台詞のことを思い出した。

（そつか。昨日笹山に言われたんだっけ。）

また胸がドキつとする。

今は部活中だ。

余計なこと考えてたらまた怒られる。

集中しなきゃな。

そう思ったのも束の間。
休憩の時だった。

「先輩・・・ちょっと良いですか・・・？」

声をかけてきたのは紛れもなくあの笹山だった。

第四話：まさか、まさかの・・・??

「先輩・・・ちょっと良いですか・・・？」

なんでだ？

なんでそんなにひっそりと、小声で話しているんだ？
それも人にあまり聞かれないようにしてるみたいだし。

俺、何かしちゃったわけ・・・。

そんな不安が頭の中を駆け巡っている。
でも休憩中とはいえ今は部活中だぞ。

「あ、ああ。別にいいけど・・・。どうした？」

やべえ、変な風に返事しちゃったかも。

胸の鼓動はどんどん早くなり、手に汗も握っている。

冷静な思考が出来なくなってくる。

覚悟を決めたかのように息を呑む。

笹山が他の人に聞こえない程度に話し始める。

「実は・・・。」

心臓が裂けそうになり、背中に冷や汗まで掻いている。
そんな・・・そんなまさか、ね？

「明日の事なんですけど・遊園地と映画館とショッピング、どこがいいですか?！」

「・・・へ?」

さっきまでの緊張が一気に解け、つい情けない返事をしてしまう。
何を期待してたんだろ。めちゃくちゃカッコ悪い。

「明日、遊園地と映画館とショッピングだったらどこに行きたいですか？」

「あ、明日かあ。ごめん。うーん・・・笹山達が行きたいといいよ？」

ちょうどお金は貯まっていたし遊園地のように高い出費でもなんとなる。

「ホントですか？！ やった！ 遊園地に行きたかったんです！」

「じゃあ遊園地？ 他の二人は平気なの？」

「はい！ みんな遊園地って言ってて・・・。先輩だけ違ったらどうしようかと思いましたよ。」

（いや、みんな同じだったらすすがに俺でも空気読むって・・・。）
そんな事を思いつつも先ほどの疑問をぶつけてみる。

「笹山、なんでさっきから小声なんだ？」

「だって・・・」「コラッ！！ 斉藤、笹山！ いつまで話してるんだ！ 始めるぞ！！！」

「はい！」

二人同時に返事をする、笹山が微笑む。

「こういう事ですよ！ 大声で話していると怒られちゃいますし・・・。」

（そういう事だったのか。）

いつも尊敬していた顧問だがこのときはかりは心底恨んだ。
もうちょっと話していたかったなあと嘆いていた。

「今日の練習は200m。昼までに時間があればもう少し他の事を
やと思う。二組にわかれて行う事。」

顧問が簡単に説明するとさっそく準備に取り掛かる。

俺のやってる種目なので内心嬉しい。

専門は400mだけど・・・。

俺と翼、そのほかの二年は一組目、笹山や他の一年生は二組目に振
り分けられた。

「昨日の借りは返させてもらうからな。」

そう翼に言われるとこちらも黙ってはられない。

「では、スタート5秒前！ 4・3・2・1・スタート！」

一組目が一齐にスタートする。

俺たちの部活は全員揃っても15人いるかいないかなので一組あた
りの人数は少ないが・・・。

早くも俺と翼はトップに躍り出る。

順調に加速していき良い感じで走る事が出来ているが翼の前に出る
事は出来ない。

翼がインコースで俺がアウトコースを走っていた。

どちらが先頭、というわけではないがコース的に俺の方が劣勢にな
る。

同じ地点からスタートした場合インコースの方が有利なのだ。

（くそっ、やっぱし早いな・・・）

そう考えながら一生懸命走っていると残り100m地点まで到達する。

翼は専門が100mのため、そのスピードを生かし最初から思いっきり飛ばすタイプ。

いつもの調子ならこのあたりで徐々に落ちる、そう踏んでいた俺だったが今日の翼は違った。
なぜか落ちないのだ。

俺は自分でもよくわかるほど焦っていた。
翼にも気づかれてしまいそうなほどに・・・。

そんな一瞬の気の迷いが走りに影響したのか翼に先頭を奪われる。
このままでは追いつけない、そんな焦りが俺の肩に力を入れてしまう。

そう、走りというのは肩に力が入ると一気に筋肉が強張って減速してしまう。

つまりこの時点で俺の負けは決定していたようなものだ。

案の定、そのまま翼にゴールインされてしまった。

もちろんなんとかして抜かそうと頑張ったわけだが・・・。
後から他の二年が次々にゴールしていく。

「これで借りは返したぜ？」

「ああ、そうだな。」

疲れてはいたが二人とも笑顔だった。

結果としては負けてしまったが物事をやり遂げた充実感があった。

これは勝った翼も同じであろう。
そんな事を考えながら顧問のところへ。
いわゆる「アドバイス」を頂くのだ。

「片桐、今の走りはよかったぞ。大会でもあれくらい落ちなければいいな。」

「はい。ありがとうございます。」

「斉藤。最後は力が入りすぎていた。あれでは出せる記録も出せなくなってしまうぞ。大会ではそれは無いようにな。」

「はい。気をつけたいと思います。」

二人はそんなアドバイスを貰うと一年生の走りを観賞することに。
特に笹山は地区でトップクラスの实力を誇っていたので期待していた。

なんせ二度目の大会でいきなり一位で県大会に出してしまうような子だ。

気にしない方が難しいだろう。

まあ、別に意味で気になるってのもあったのだが・・・。

それにもう一人見ておきたい子がいた。

筒井綾香。

笹山と仲がよくいつもくっついていて。筒井も地区でトップクラスの实力を持っていた。

二度目の大会で笹山が県大会に出た時、この子は二位だった。
ちなみに明日、遊園地に行くもう一人の一年生とは筒井の事だったらしい。

前々から聞いていたが翼の気になっている人、らしい。

こんな事を思っているうちにスタートしてしまった。
やはりトップに出たのは二人だった。

あの二人は俺と翼のような関係なのだろう。

先ほどの自分達と同じでお互い一步も譲らない。

そんな調子で150m付近まで来ている。

これも俺と翼と同じ「意地の張り合い」なのかと思った。

だが、どちらも前に出る事は無く同着でゴール。

ひたすら前へ前へと走る二人の姿は凛々しく、美しくとても輝いて見えた。

俺も翼も他の二年生も良いものを見せてもらったと言わんばかりに出迎える。

勝ち負けこそなかったものの二人の顔にも充実感が溢れていた。

その後、何本が続けるとすぐに昼になった。

午後は軽くミーティングをするとすぐに終わる。

ミーティングの内容は大会までわずかなため、体調管理について。

後、この大会での決意表明のようなものをした。

俺たちの部活では珍しくない事なのだ・・・。

そして帰り際。

今度は翼に呼ばれた。

また明日の事だろうと思っていたが少し様子が違う。

「竜二。ちょっといいか？」

「・・・別にいいけど？　なんか深刻そうだな・・・」

俺は気になりつつも人気のない公園で翼と落ち合う事にした。

第四話：まさか、まさかの・・・？（後書き）

最後の方、こじ付けっぽく終わらせてしまっただけ申し訳ありません（汗）
なおインコースが有利なのは同じ位置からスタートした場合で実際の競技場のようにレーンがきちんとしている所では3・4レーンが走りやすいそうです。

第五話：またまたお呼び出し？（前書き）

いきなり翼に呼び出された竜二。

翼の話とは・・・？

第五話：またまたお呼び出し？

翼がとても深刻そうな顔をしていたので俺も少し緊張気味だった。

「あのさ。」

「どうした？　大丈夫か？」

その深刻そうな顔に思わず気遣いの言葉が出る。

「大丈夫。一個聞きたい事があるんだ。」

「いいけど？」

何を言われるかまったく検討がつかなかった。
まさかこんな事を言われるなんて。

「実は筒井の事なんだけど・・・。」

「ああ、さっきの子だろ？　すごいよな！　あの子がどうした？」

いきなり筒井の話が出てくるとは。

続けて翼が言う。

「お前、あの子の事好きか？」

「えっ？」

「筒井の事をどう思ってるか聞いてんの！」

思わず聞き返してしまった。

翼から筒井の事が気になっていいるとは聞いたが俺が筒井の事を気にしているなんて言った覚えはない。

「俺は別・・・本当の事言えよ！！　ごまかすんじゃねえ！！」

否定しようとした所、翼に物凄い剣幕で遮られてしまった。
ここまで凄い剣幕で怒る翼は久しぶりに見た。

「だから何も無いって！　いきなりどうしたんだよ？！」
いきなり怒鳴られて理由を聞かない方がおかしいだろう。

「そっか・・・。いきなり怒鳴って悪かったな。ごめん。」
急に冷めた感じに戻り冷静さを取り戻したかのように見えた。

「ちよつと待てよ。お前がいきなり怒鳴るわけないだろ？　理由を
言えよ。」

昔からの付き合いだ。

翼がいきなりキレるような奴じゃない事は俺がよく知っている。
そんな翼が怒鳴ったのだから余計に理由が気になる。
無駄に詮索しない方がよかったのかもしれないが・・・。

「うるせえな。関係ないだろ？！　もういい！」
こんな言い方をされてはこっちだって腹が立つ。

「めちゃくちや関係あんじゃねえかよ！ 大体あんな風に言われたら気になるに決まってるだろ！？」

「だからそこは謝っただろ？！ いちいちしつこいんだよ！！！」

さすがに俺もキレた。

なぜここまで否定されなければならなんだ？

沸々と怒りがこみ上げてくる。

「ふざけんじゃねえ！！ お前がいきなり聞いてきたんだろ！！ お前こそウザいだよ！」

「はあ？！ ふざけてるのはそっちの方じゃねえか！！！」

すでに翼もキレていた。

次の言葉を発しようとしたその瞬間。

バシッ！！

翼の右の拳が俺の左頬に入る。

とっさに目を瞑り、仰け反ったがすぐに体勢を整える。

「痛いじゃねえかよ！」

胸倉を掴み、そう吐き捨てた。

自分の方向に翼の体を引き寄せると膝を上げ、鳩尾の辺りに蹴りを入れる。

多少くの字に曲がるがその程度では堪えない。

今度は俺の腹に目掛けて拳を繰り出してきた。

胸倉を掴んでいたため、避ける術は無くそのまま食らう。

翼同様、俺も体をくの字に曲げる。

が、俺だつてこれくらいじゃ堪えない。

蹴りを繰り出そうとするが先手を取られ、左腿に蹴りが直撃した。

すかさず俺も翼を蹴り飛ばした。

翼はその場に倒れ、尻餅をつく。

このまま立ち上がってきたら、また引つ叩いてやろうと思っていたが。

何か言ってきたのでそれは止めにした。

「はぁ・・・やっぱ殴り合いじゃ負けちまうか。竜二、俺が悪かった。ごめんな。」

「ふう・・・口じゃお前には敵いつこないな。あのままだと俺が手出してた。悪い。」

まさに「雨降って地固まる」という言葉の通りだろう。

「ところで・・・。」

「さっきの事だよな。」

「ああ。」

「やっぱりお前には隠し事出来ないな。」

喧嘩の原因であるこの事だったが聞かずにはいられなかったのだ。堪忍したかのように翼が言々と事の経緯を話し始める。

「実は俺、筒井と付き合ってるんだ。」

「……えええええ！！！！」

ただただ驚くしかなかった。

筒井と翼が仲良さそうにしている所はあまり見てなかったし。

（だったら翼が告白したのか？）

色々な疑問があるが一つずつぶつけてみる。

「でも、それが俺と何の関係があるんだ？」

「練習の時、ずっと筒井の事見てたたる？　この時だけじゃない。何かとお前、筒井の方に近づいてたし。」

「……はい？」

（……いくらなんでも誤解しすぎだろう。）

さっきのは確かに見ていたけど、それはレースを観戦してただけで。

正直に言っちゃうと見たのは笹山の方だったし……。

近づいてるって言うけど、それは筒井の前にいる笹山に用があるわけ。

「誤解だつて！　確かに見てたけどあれはレースを観戦してただけ！　何も無いって！」

翼のあの深刻そうな目は疑っていた目だったのか。あいつも俺と同じく「嫉妬」しているのだろうか？

「俺、あいつの事になると見境が無くて……。本当にごめん！明日ジューズおごるからさ？」

ジューズ一本で終わらせようとする所が翼らしい。

「はいはい。もういいって。明日忘れるなよ〜?」
「了解! ってかー、竜二は好きな子とかいないの?」

(ドキッ。)

一瞬、翼から目を逸らす。
だがそれもバレていたようだった。

「おお! とうとう竜二にも! まあ、さしずめ笹山あたりだと思うけど。」

(なんでだ?! 翼に言つた覚えは無いぞ?)

「竜二くう〜ん? 焦りすぎですよ〜? バレバレなんだって!」
翼が猫なで声で俺をからかってくる。

(あの凄まじい剣幕はいつこに?!)

密かにそう思いながら俺も堪忍したように言う。
「わかったよ! 笹山のことが好きなんだよ!」

すかさず翼が突っ込みを入れた。

「やつぱり〜? 顔真っ赤ですよー?」
「馬鹿! お前に殴られたからだよ!」

とつさに言い返すが無駄であつた。
「ごめん! でも俺、片方しか殴ってないし〜。まあ、笹山可愛いもんな。頑張れ〜。」

（つつく。急に調子づきやがって・・・）

心の中で舌打ちをした。

まあ、なぜか顔が火照っていたのは本当なのだが。

「じゃあ帰ろうぜ？ 明日は10時に駅だぞ？ また遅刻しないようにな。じゃ！」

「あれはアラームが！・・・いいや。じゃあな。」

短く別れの挨拶をすると家に着く。

あまりにも疲れていたため、すぐに風呂に入るとそのまま寝てしまった。

この時はまだ明日、あんな事になるなんて思いもしなかった。

第六話：びっくりお化け屋敷

朝。俺は飛び起きた。

昨日、一昨日のように遅刻してはたまらない。

9時。駅までは大体15分くらいと見て平気だろう。
この時間なら余裕で間に合うな。

早めに朝の身支度を済ませる。
後は洋服、か。

自分のセンスにあまり自信が無かった。

派手なものは好きじゃないし。

笹山もいるんだし、どうせなら良く見られたい。
そう試行錯誤しながら選んだのだが。

黒系のジーンズに白のタートルネックのニット、その上に茶系の皮製ジャケット。

アクセサリーはあまり好きでは無いので、腕にブレスレットを二つしただけ。

他人から見たら極々普通の服装だと思うが変に目立つよりいいだろう。

最後に髪の毛を軽くチェック。
ワックスも好きではない。

俺は基本的にチャラチャラした服装が嫌いだ。

みんな揃ってそんな服装ばかりするのが理解出来ない。

（寝癖は立ってないな。）

そう確認するといよいよ駅へと出発する。

歩いている間、何回も時計を確認した。
今度こそ遅刻したくなかったからだ。
危ないとは思っていたが・・・。

そんな事をしているうちに駅へ着いた。
(10分前。大丈夫そうだな。)

エスカレーターに乗り、待ち合わせ場所であつた券売機の前の柱へ行く。

昨日、寝ている時にメールが来て知らされたので少し忘れかけていた。

その柱の近くまで行くとすでに全員来ているではないか。
少し焦って小走りに皆のところへ急ぐ。

「今日は遅刻しなかったみたいだな。」

翼が時計を見ながら言う。

「ホントだ！今日はよろしくお願いしまゝす。」

女子二人が同じタイミングで言う。

「俺だって毎日遅刻はしないって。こちらこそよろしく！」

「じゃあ、出発しましょ？」

早く早く！とでも言いたいのだろうか笹山が嬉しそうに言う。

彼女の嬉しそうな笑顔にまたしても胸の鼓動が早くなるのを感じた。

切符を買い、電車に乗り込む。

今から行く遊園地は電車で約一時間つてとこだ。

それまでの間、俺たちは他愛無い話で盛り上がった。

勉強の事やら部活の事やら顧問の愚痴やら・・・。

迷惑にならないように小声で話すよう注意したりすると「保護者」
みたいだと笑われてしまった。

そんなやり取りを楽しんでいるとすぐに目的地に着く。

いかにも「遊園地」らしい遊園地だ。

ループのある高くて長いジェットコースター。

ゆっくりと回りながら町を見下ろす観覧車。

おどろおどろしい雰囲気のお化け屋敷。

遊園地の定番であるアトラクションが目立つ。

久しぶりに来たためつい、圧倒されてしまう。

「先輩！ 何してんですか？ 置いてっちゃいますよ？」

「悪い悪い。って・・・ちょっと待てよ！」

置いていかれると言われて本当に置いていかれるとは思わなかった。
こういう場で女子のハイテンションさには驚かされる。

「まずはこれでしょ！」

筒井が指差す。

「綾香好きだよねー。 さ、行きましょー！」

二人の視線の先にはさっきのお化け屋敷があった。

さっそく中に入ろうとすると翼が小声で耳打ちしてきた。

「竜二、ビビってカッ」悪いとこ見せるなよ？」

「うるせえ！ お前こそ！」

翼の顔を振り払うように退ける。

簡単なやり取りを交わしていると隣から急に話しかけられた。

「お客様、通路が大変狭くなっておりますのでご注意ください」

血まみれの白衣を着たナースらしき係員。

中はどうやら「廃病院」という設定らしい。

入り口から入り、霊安室を目指すというつもりだそうだ。

基本的に一本道なので迷う事は無いとの事。

適当に頷くといよいよ中へと入る。

確かに通路が狭い。

俺と笹山を置いていつてしまつかのように翼と筒井はどんどん進んでいく。

（そういえば翼もこういうの好きだったっけ・・・）

そんな事を思い出しているうちに中が暗かった事もあり二人を見失ってしまった。

と、いう事は・・・？

笹山と二人きり。

心臓がはちきれんばかりに脈打つ。

「あらら、二人とも行っちゃいましたね。ま、仲良しの二人はそっ

「としといて行きましょ」

暗くてよく見えなかったが満面の笑みを浮かべている気がした。

奥へ進むと笹山が何か踏みつけてしまったようだ。

慌てて下を見るとそれは真っ赤に染められた手。

作り物とはいえ、良く出来ている。

冷静に苦笑していた俺とは違い笹山はかなり驚いたようだ。

「きゃ！」

「なんだ、笹山は怖いのが苦手か？」

「そんな事無いですよ！」

必死に否定するが顔に出ている。

本当は怖いのだろう。

俺も別の意味でドキドキしているが。

その手を後にし、さらに奥へ進む。

なぜか不自然な場所にロッカーが置いてある。

（はは。ここから飛び出してくるんだろうな。）

そう高をくくってロッカーの先へ進もうとする。

しかし、ロッカーからは何も出てこない。

その奥からゾンビらしき人が飛び出してきた。

これには俺も驚いた。

遊園地側の策略にまんまとはまってしまったのだ。

「うおっ！」

「きゃー！」

二人でゾンビの横を駆け抜け抜けると病室のドアが描かれている通路に

出た。

何気に「トリックアート」らしい。

「怖かった」。いきなり出てくるんだもん！」
この時、右手の違和感に気がつく。

（ん？ 俺、何か持ってたっけ？）
ふと見てみるとなんとそこには笹山の左手が。
しかもがちりと握られている。

（え？え？え？ これっていいの？！）
心臓が破裂してしまいそうになる。
思いつきり叫んでしまいそうにもなった。
冷静な判断が出来ない。

「さ、さ、笹山？ て、手・・・いいの？」
「えっ？ ご、ごめんなさい！」

手に気づくとパツと離す。

薄暗い中お互いに顔を真っ赤にし、目を逸らす。
しばらくの間、そんな状態で奥へと進んでいると笹山が口を開いた。

「・・・怖いからやっぱり手、握ってても良いですか・・・？」
「・・・うん。」

思わぬ返答にまた心臓が破裂しそうになるが深く頷く。
向こうもかなり恥ずかしそうだ。

「じゃ、じゃあ行こうか？」

「は、はい。」

手を軽く握り合つとさらに奥へと進む。

もはやお化け屋敷の怖さよりも笹山と手を握って歩いている、という状況の方が怖い。

今度はたくさんさんの壊れたベッドが並ぶ、病室のような場所へ出た。
奥に行くにはここを突っ切らなければならない。
いかにも何か出そうな雰囲気だったので俺も笹山も歩く早さは早くなつた。

と、そのとき。
壊れて誰もいないはずのベッドから何かが這い出してうめき声を上げている。

「きゃー！！！」

笹山がうめき声をかき消すほどの声を上げる。
とにかくここをダッシュで突っ切った。

普段、走りなれているはずの二人だったが息を切らしている。
病室をようやく抜けると更衣室のような所に出た。

・・・ロッカーがたくさんある。
ロッカーがトラウマになりそうだ。
ここも急いで突っ切ろうとする。

ガタガタガタッ！！

二つか三つ、ロッカーが動き出す。
俺が笹山の手を引き、ここを抜ける。

いったい霊安室にはいつになったら着くのだろうか。

そんな事を考えていると目の前には「霊安室」の文字が。
何も無いただの廊下だったので普通に歩く。

「ようやくゴールだな。」
「怖かった。」

そんな風に安心していた。

が、しかし。

トリックアートだと思っていたドアが一斉に開き、ゾンビが出てきた。

俺も笹山も思わず声を上げる。

「うわっ！」

「きゃー！！！！！」

早めに駆け抜けようと小走りに霊安室の前まで行くと首筋に冷たいものが。

定番のこんにゃくだ。

いつもなら笑って終わるがそんな余裕は二人には無い。

「きゃー！ きゃー！！！」

笹山が叫ぶ。

何かが腕に必死にしがみついてくる。

霊安室のドアを開けると明かりが眩しい。

まだ笹山は目を瞑っているようだ。

俺はずっとしがみ付かれている事に気がつかず、今になって慌てふためいた。

「ほ、ほら。もう外だぞ？ つ、翼たちの所に行こう？」

お化け屋敷だけで死んでしまいそうだ。

「え？ あっ・・・！ せ、先輩！ 何度もごめんなさい！」

またパツと離れたが手は未だに握ったままだった。

外に出ると翼と筒井が待ちくたびれたとでも言わんばかりの視線を送ってきた。

が、俺たちの「異変」に気がつくとすぐにやけた翼が耳打ちしてからかってくる。

「竜二！　ちゃっかり手繋いでるじゃんか！　いい感じ！」

反論する気にもなれなかった。

このまま心筋梗塞が何かで死んでしまいそうな感じだった。

筒井が次のアトラクションを指差す。

次に指差したものは・・・？

第六話：びっくりお化け屋敷（後書き）

またありきたりで申し訳ありません。

手繋ぐのところにゃくはやりたかつたんです（笑）

もう少し遊園地編が続きます。

第七話：沈黙の果てに・・・。

筒井が指差した先には・・・。

思わず呆然としてしまったジェットコースターがあった。実のところ、俺は絶叫系のアトラクションが大の苦手だ。翼も苦手だと聞いている。

先ほど賛成したのは筒井に言われたからであろう。どうにかしてこの状況を避けたい。

「筒井？ 昼飯食べてからにしないか？」

時計を見ると12時半。

ちょうどお昼時だ。

「ああ。俺も腹減ってきたな。そうしないか？ 綾香。」

いつの間にか名前と呼んでいる事に気がついたが指摘しないであげよう。

「うーん・・・まあ、いつかあ。」

笹山も無言で頷く。

先ほどの恐怖がまだ拭いきれていないのか、未だに俺の手を握ったままだ。

それが幸か不幸かはわからないがとても体に悪い事は確かだ。ずっと心臓はドキドキしたままだし、背中に変な汗を掻いている。

俺たちはとりあえず近くにあったフードコートへ向かう事にした。適当に昼食を買って空いている席へ腰を下ろす。

くだらない談笑をしながら盛り上がる。

さすがの笹山も恐怖を拭いきれたようだ。

そんな談笑をしながらあまり知らなかった筒井の事も徐々にわかってきた。

俺のイメージではいつも笹山の後ろにいる大人しい感じの子。

けど、それは部活に真剣に取り組んでいるだけで本当はすごく明るい。

むしろ笹山を引っ張っていくような感じらしい。

背は比較的小さくて、髪型はショート。

容姿はまあまあだが私服のセンスが良い。

翼が言うには大きくてつぶらな瞳で見つめられると死にそうになるとの事。

・・・溺愛するのもいい加減にしろと言いたい。

ちなみに笹山の私服がとても似合っていて可愛くみえたのは内緒だ。

昼食も食べ終わり、適度な休憩も終わった。

すると待ってましたと言わんばかりに筒井が言う。

「じゃ、ジェットコースター乗りましょ！」

複雑な気持ちだったがみんな行くと言う中、一人反対するのは・・・。

というより反対出来ない雰囲気になっていた。

嫌々ジェットコースターの乗り口まで行く。

笹山と筒井は絶叫系が大好きらしく、一番前に乗りこんだ。俺たちはその後ろに乗らざるを得ない状況になってしまう。

安全装置を下ろし、コースターは出発する。

よくよく考えると昼を食べた後なんて余計に気持ち悪くなるじゃないか。

自分でも馬鹿な事をしたと思う。

なんて考えていてもあざ笑うかのようにコースターは頂点へと登っていく。

（ああ・・・ついにこの瞬間が・・・）

頂点へたどり着いたと思った途端、急降下が始まる。

体が浮くかのようなフワツとした感覚に襲われる。

必死に声を出さないように堪えた。

が、しかしそんな努力もループに差し掛かると無情に消え去る事となる。

周りの世界が逆さまになり、頭から落ちてしまいそうになる。

歓喜の叫びか恐怖の叫びかはわからないが周りから幾度と無く叫び声が聞こえる。

前の二人はずーっと「キャー！」だとか「楽しいー！」とか言っている。

これのどこが楽しいのだろうか・・・。

ループの先端に着くと多少スピードが落ちるがまたしても急降下。思わず翼と叫んでしまった。

「うわーっ!!」

その後、5分間ほどコースターは走り続け、ようやく止まった。

もうこんな乗り物二度と乗りたくない!とつくづく思った。
が、そんな思いは女子二人には届くはずもなく。

この先二時間半ほど二人の好きな絶叫系に付き合わされる羽目にな
ってしまったのだ。

彼女にデレデレの翼と断りきれない俺ではしょうがない。

本当はもう少しつき合わされそうだったのだがそれに拍車をかけた
のは翼だった。

「なあ、二人とも・・・もう少しで日が暮れ始めるぞ? そろそろ
最後にして、最後までくらい絶叫系以外にしないか・・・?」

苦手な絶叫マシンに散々付き合わされた俺たちはまるで死んだ魚。

「そつかあ。じゃあ、最後はやっぱアレでしょ!」

笹山と筒井がニコニコしながらパンフレットの地図を見る。

どうやら観覧車に乗りたいうた。

これなら少しゆっくり出来そうだな、と俺たち二人はホッと安堵の
息を漏らす。

すると女子二人が何かヒソヒソと話していた。

良く見ると筒井が何かを笹山にお願いしている。
それをしようがないなあ、と言わんばかりにOKする笹山を見ると

筒井は大喜びしていた。

クタクタになりながら観覧車の乗り場まで行くと今度は翼が俺に小声で

「竜二、頼む！俺と綾香で乗せてくれ！あいつ、観覧車に好きな人と乗るのが夢だったみたいで……。お願い！」

と言われた。

こんなとき、ついついいつもの悪い所が出てしまう。

ましてや親友の翼の頼みだ。

断りきれぬわけがない。

「仕方ないなあ。わかったよ。愛しの筒井さん達には何も言わなくていいのか？」

断らないかわりに少し嫌味っぽく言う。

「さっき二人で話していただろ？あれがそうだったみたいだから大丈夫！」

そうこうしている間に順番が来る。

先に翼たちが乗り込むと翼が俺に言う。

「頑張れよ！！」

つい、大声で反論したくなったがそのときにはもうゴンドラに乗って二人で手を振っていた。

軽く舌打ちをするとすぐに俺たちのゴンドラも来る。

二人で中に入り、丁度斜めになるように座ると係りの人がドアを閉めてくれた。

しばらく沈黙が続く。

何か話しかけなければ、と焦る俺だったが先に笹山が口を開いた。

「あの。今日は本当にありがとうございました！」

「ああ、大丈夫大丈夫。楽しかったし。」

少し間を空けてからもう一度口を開く。

「後、ずっと手握ったままですみませんでした!!」

夕日で顔が赤くなっているのか恥ずかしいのかわからなかったが笹山の顔は真っ赤だった。

「あ……。別にいいよ。お化け屋敷も結構楽しかったし・・・」

俺も思わず顔が赤くなり、目を逸らしてしまう。

会話が續かない。

ゴンドラの中で二人きり。

さらに会話が續かないというのはとても気まずいものだ。

頭の中で色々考えるがどれもパツとしないものばかり。

そんなもどかしい思いをしているとまた笹山に先を越されてしまった。

「せ、先輩。と、隣座ってもいいですか・・・？」

思わぬ言葉にたじろぐ。

とても頑張って発した言葉のように聞こえた。
だが俺には驚くことしか出来なかった。

「・・・う、うん。いいよ。」

胸の高鳴りは最高潮になり、冷や汗もたくさん出てくる。
お化け屋敷以来、なんか積極的というか大胆と言つか・・・。

たまたま手を繋いでしまった時点で気絶してしまいそうだったのに・
。。。

好きな人が自分の隣に。

ましてやこんな狭いゴンドラの中。

二人の距離なんて1mも無く、せいぜい3〜40cmくらいだろう。

本当に発狂してしまいそうだ。

必死に窓の外に映る綺麗な夕日とそれに照らされる街を見るがまったく気が紛れない。

「夕日、綺麗だな。」

この状況を打破するにはやはり会話しか無いと考え、無い頭をフルに使って考えた言葉だ。

「はい、とても綺麗ですよね。」

だよな、と言おうと思いつき少し振り返るとこの近距離で目が思いつきり合ってしまった。

慌てて顔を元の位置に戻し、また夕日に目を向ける。

そろそろゴンドラは頂点に達しそうだ。

また次の言葉を考えていたところ、今度は笹山がゆっくりと話し始める。

「先輩は・・・私のこと、嫌いなんですか・・・？」

今までのどの言葉よりも大胆で衝撃的で。

俺が一度も見たことが無かったとても、とても悲しい目をしていた。

今にも泣き出していまいそうな・・・俺が一番見たくなかった目。

それはゴンドラが丁度一番上に来た時の事だった・・・。

第七話：沈黙の果てに・・・。（後書き）

一気に二人の距離が縮まっちゃいました（笑）

こっ見ると翼と綾香はかなりのバカップルですね^^；

毎度毎度ありきたりな内容で申し訳ありません（汗

第八話：悲しき誤解

なぜだ、なぜそんな悲しそうな目をするんだ。

「ご、ごめんなさい・・・いきなり変なこと聞いちゃって・・・。」

必死に作り笑いをして誤魔化そうとしている。

しかしその姿はとても痛々しく誰が見ても見破る事の出来る笑い方だった。

好きな人が目の前で悲しそうな目をしているのに俺はどうすれば良いのかわからない。

優しい言葉をかけてあげる事も出来ず、ただ近づいてくる地上を眺める事しか出来ない。

そんな情けない自分がとても不甲斐なく感じた。

「ご、こんな事どうでもいいですよ・・・。」

（嫌いなわけじゃないじゃねえかよ・・・俺にとっては重要なんだよ。）

「・・・かよ。」

「えっ？」

重く閉ざしていた口をようやく開くことが出来た。

「笹山の事・・・嫌いなわけないじゃねえかよ・・・。」

うまく言う事が出来ず、聞き取りにくい声になってしまった。
それだけならまだしも言い方にどこか棘のある、とても冷たい声だった。

そんな声であつても笹山はしっかりと返答してくれた。

「だつたら、なんで・・・？」

何かを思いつめたようなそんな感じで問いかけてくる。

そのときだった。

笹山の目から先ほどまでずっと堪えていたであろう、大粒の涙が零れ落ちたのは。

「なんでいつも私の方をきちんと見てくれないんですか・・・？」
一度零れ落ちてしまった涙は止まる事無く流れ出す。

「いつもいつも先輩は私と顔を合わせるたびにそっぽ向いたり目を逸らしたり・・・」

もうこの時点で笹山は号泣してしまっていた。

俺は好きな子を泣かせてしまったんだ。

そんな自己嫌悪が急に襲い掛かってくる。

「片桐先輩や綾香の時は真っ直ぐに目を見て話しているのに私の時は違ってて・・・ひつく。」

だから・・・私だけ先輩に嫌われちゃってるのかって思って・・・えぐっ。」

ところどころに泣くとき独特のしゃっくりのような感じが入る。

「違っっ！！ 違うんだ・・・」

思わず声を荒げてしまう。

俺にはこうして否定するしかなかったんだ。

「俺は・・・」

（嫌いだから逸らすんじゃないくて、好きだから合わせられないんだよ・・・）

言おうとした瞬間、無情にもゴンドラの扉が開かれる。

「ご利用ありがとうございます。」

係員の営業スマイルが飛んできた。

余計なお世話だ。

ましてやこんなときだ、空気くらい読んで欲しい。

俺たちは無言のままゴンドラを後にすると、先に降りて待っていた翼たちの元へと向かった。

二人とも俺たちの尋常ではない雰囲気を感じてくれて変に詮索されることは無かった。

しかし詮索されなかったとはいえ気まずい雰囲気である事には変わ

りない。

すぐに遊園地を後にすると、この雰囲気のままそれぞれ帰宅していった。

さつさと着替え、そのほかには何もせずにベッドへと。
先ほどの状況から早く逃げ出すかのように。

目を瞑ってこのまま消えてしまいたい気分だった。

俺の何気ない行動が笹山の事をあんなにも傷つけているなんて。

「先輩は・・・私のこと、嫌いなんですか・・・？」

「なんでいつも私の方を見てくれないんですか・・・？」

「片桐先輩や綾香の時は真っ直ぐに目を見て話しているのに私の時は違ってて・・・ひつく。」

「だから・・・私だけ先輩に嫌われちゃってるのかって思って・・・えぐっ。」

あの必死に作った作り笑いが。

あの今にも泣き出しそうな目が。

あの涙が零れ落ちて止まらなくなってしまった泣き顔が。

走馬灯のように俺の頭の中を駆け巡る。

心が痛む。

ドキドキするのではなく心臓を抉り取られるような感じ。

俺は・・・笹山の事が好きなのに・・・。

嫌いなわけ、ないのに・・・。

第八話：悲しき誤解（後書き）

読後感が非常に悪くて申し訳ありません^^；

告白は大会が終わってから！って勝手に決めちゃってて（え

大会は小説の中で見て明後日になります。

多少もどかしい感じはあるかもしれませんがもうしばらくの辛抱を・
・。

第九話：決意

気がつくとすでに朝になっていた。
どうやらあのまま眠っていたようだ。

最悪に目覚めが悪い。

誰かに睡眠を妨害されたわけではないが嫌な気持ちだ。

昨日のことが嫌でも思い出される。

頭の中から拭い去ることが出来ないのだ。

顔を洗ったり、朝食を済ませたりすれば楽になるだろうと思ったが
そうはいかない。

いつもより暗い足取りで学校へと向かう。

今日は前のように遅刻はしなかったもののみんな集まっていた。

笹山も・・・。

昨日、あれだけ言われたのに極力近づかないようにしてしまった。
向こうも俺になるべく近づかないようにしてるのが窺える。

お互いに視線を合わせようとしない。

そんなことが積み重なり、さらに気まずい雰囲気になっていった。
目を見てしまうとどうしてもあの悲しそうな目が浮かんでくる。

なんであの時言うことが出来なかったんだ。
そんな後悔が押し寄せてくる。

あの時、言うことが出来ていればこんな風にはならなかったかもしれないのに・・・。

こんなことを考えながら、朝連や授業をこなす。

午後は専ら明日の連絡。

俺がそこまでグイグイと引つ張らなくても大丈夫だった。しかし何をやったのかまったく頭に入っていない。どうしたらいいのか朝から午後まで考えていた。

そして、一つの結論にたどり着く。

（やっぱり言えなかったところ、伝えた方がいいよな・・・。）

大会終わったらきちんと伝えよう、と心に決めた。
その大会は明日なのだが・・・。

あいにく自分ではなんと言っているのかわからない始末。
相変わらず情けない。

（また姉貴に？ 最近相談してばっかだし・・・。）

翼の馴れ初め話でも聞いて参考にしてみるか。
あの様子だとまた彼女自慢かなんかに発展しそうだけど。

「翼？ お前たちって、どんな風に告白したの？」

「ああ、俺が告ってOKしてもらったの。・・・聞きたい？」
いかにも聞いてくれという目をしている。

「うん、お願い。」

「どうせ参考にしたいかと思ってたんだろ？ わかってるって。」

（うつ・・・図星。でもこの発言、そうとう自信が無いといえない
よな・・・）

細かい部分は気にしないでおう。

「えっと、部活終わった後に呼び出したんだよ。ちょっと来て？つ
て。もちろん誰にも気づかれないようにな。で、人がいないことを
確認したんだ。そして告白。確か自分の思ったままに伝えたと思う。
『好きです！付き合ってください！』ってな感じで・・・」

予想通り、そこから延々と筒井との話が始まりそうだったので切ら
せてもらった。

「そっか。ありがとな。」

「最後まで聞いてくれればいいのにー。まあ、参考にしてくれよ。」

（自分の思ったままに伝える、か・・・）

頭の中で何度も繰り返しながら家に帰った。

風呂の中でも夕飯を食べている時もずっと言葉を考えていた。

もちろんいつも考え事をするベッドでも。

（明日は大会なんだから早く寝なきゃダメだな）

俺はそう考えると眠りにつく。

明日が忘れることの出来ない日になろうとは思わなかった・・・。

第九話：決意（後書き）

いよいよ大会になりました。

もうそろそろこの小説も終盤となります。

最後まで読んで下さると光栄です^^

第十話：それぞれの戦い

いよいよ大会当日。

さすがの俺でも今日は遅刻しなかった。

というか大会当日に部長が遅刻なんてしたら大問題だろう。

学校のトラックとはまったく違う赤い、きちんと整備の整っているトラック。

俺はここを思いっきり駆け抜ける。

目指すは一位。

今までの成果を出すまでだ。

本番まではまだ時間があるので入念にアップを済ませる。

専門種目である400mは勝ち取らなければ・・・。

顧問や他の先生方から散々期待の眼差しを浴びせられているのだから。

そんなプレッシャーが重く押し掛かる。

だがそれに負けないで記録を出すのが強い選手だ。

落ち着いて深呼吸をしてリラックス。

翼は100m。

笹山・筒井は200m。

（みんな頑張るんだから俺も頑張らないとな。俺は出来る！）
心にそう決め暗示をかける。

スパイクという武器を持ちユニフォームという鎧をまとい、己の「戦場」へと向かった。

召集を済ませ集中しながらストレッチ。

俺が走るのは4組あるうち1組目の4レーン。
とても良い位置だ。

速い人が前の方の組に振り分けられ、速い人から順に内側のレーンから入るからだ。

自分のレーンのスターティングブロックを合わせ、時が過ぎるのを待つ。

そしてついに・・・。

「行います。位置について。」

お願いしまーす！と大きな声が響く。

「よーい」

少し間が空く。

俺はこの間が大嫌いだ。

緊張がピークに達する。

パンツ!!!!

白い煙とともにピストルの音が鳴り響き、一斉にスタート。

一步一步確実に前へと進む。

最初のコーナーの部分は一瞬で終わり、直線へと入る。

先ほどのコーナーとこの直線でスピードに乗らないと後が厳しい。走る前はそんな心配をしていたがうまくスピードに乗ることができ順調に加速。

横一列に並んでいたがそれを大きく突き放す。

大抵、このあたりからみんな徐々に苦しくなってくる。

ちなみに300m付近までスピードを保つ事が出来るのが俺のとりえ。

全員突き放す事が出来たと思ったが一人、隣にいた。

肩に力を入れないように前へと出ようとするが向こうもついてくる。コーナーですつと競り合っているといよいよ最後の直線に入る。

ここからが400mの一番キツイ所だ。

足に乳酸が溜まり、パンパンになる。

常に腕も振っているので腕にも乳酸が溜まり体が鉛のように重くなってしまう。

この直線に入ってもまだ競ったままだ。
向こうが焦っているのがわかった。

だが、ここで自分も焦っては翼の時の二の舞だ。
ゴールまでの距離が50m、40m、30mと短くなるにつれて応援も一層激しくなる。

ラスト20mほどだろうか。

痺れを切らしたのか向こうが軽く前に出るがすぐに落ちた。
気づけば俺の後ろへと。

このまま行けば一位。

へ口へ口になるが気力と根性で走る。

5m。4、3、2、残り1m。

そしてゴール。

止まった途端、思わずその場に倒れてしまう。
体を動かす事がままならない。

しばらく呼吸が整わなかったが少しずつ喜びがこみ上げてくる。
思い切り叫びたいがそんな元気は無い。

グラウンドに一礼してコースから外れると顧問やみんなが温かく出迎えてくれた。

最初に声をかけてくれたのは翼だ。

「おめでとう。凄かったな。」

肩にポンと手を置き、笑いかけてくる。

次に声をかけてくれたのは笹山と筒井だった。

「一位おめでとうございます！ めちゃくちゃ格好よかったですよ
！！」

笹山も昨日までの気まずさなど忘れ、激励してくれる。

そして顧問の先生から一言。

「よく頑張った。おめでとう。これからもより精進するようにな。」

普段は厳しい人だが優しく微笑みかけてくれた。

（そうだ、翼たちの試合は？）

三人に聞くと100mも200mも俺がアップしているうちに終わったとの事。

「さ、三人とも結果は？」

「全員県大会！！」

笹山と筒井がVサインを向ける。

が、ほぼ同時に翼が不服そうに言う。

「俺は二位だったけどな。一人抜かせなかった。」

すると筒井もつられたように

「私ですよ！　また香織に抜かれちゃいましたー。」

と少し膨れっ面になりながら笹山とじゃれる。

多少の悔いはあったかもしれないがみんな笑顔だった。

結果報告をし終わると他の試合を観戦することに。

あの選手は速いだの今の選手は凄かったただの一人前に言いながら。

そうこうしていると閉会式。

どこかのお偉いさんの挨拶をみんなかつたるそうに聞き流すと閉会式は終わった。

みんなの戦いはここで終わりだが俺にはやるべき事が残っている。

武器を改め、勇気と正直な気持ちを武器にまた新たな「戦場」へと。

「笹山、ちょっと話があるんだけど・・・来て？」

第十話：それぞれの戦い（後書き）

大会終わりました！。次はいよいよ！

バレンタインに更新できるよう努力しますので^^
新たな「戦い」の結果はいかに・・・？

第十一話：告白

「はい・・・わかりました。」

この間の事を思い出したかのように目を逸らしながら言う。

俺は笹山を連れて競技場の裏へと向かった。

競技場の裏側なんてよほどの物好きじゃない限り誰か来る事は無い。
少し原っぱのようになっていたが木々が多いため周りからじろじろ
と見られる心配も無い。

お互い正面を向くように立ち止まる。

まるで決闘でもするかのような雰囲気。

が、二人とも目を合わせる事は無い。

視点が定まらず、空や地面をボーッと見つめるだけ。

この沈黙はとても長く感じられた。

そしてついにこの沈黙を切り裂くように笹山が声を発した。

「この間の事ですよ・・・ね？ あの時本当に混乱してて・・・すみませんでした。」

俯くように軽く礼をする。

「ああ・・・実はあの時、ちゃんと言えなかった事があるんだ。」

大きく唾液を飲み込む。

頭が真っ白になってきて何をどうしたら良いのかわからなくなってくる。

「言えなかった・・・こと？」

ずっと俯き加減だった笹山がふと顔を上げる。

しかしそこにいつもの元気は無く、あの時の悲しい目をしていた。
心を見透かされるような純粹で潤んだ瞳。

その瞳にはまた涙がたまっているように見えた。

「まずは顔を背けたり、目をわざと逸らしたりしてごめん。でも・
・」

「でも・・?」

大きく深呼吸をしてから腹をくくる。

今までに味わった事の無い緊張感。

そして今までに無いくらいの重く、暗い空気が流れる。

「笹山の事が嫌い顔を背けたりするわけじゃないんだ。」

「えっ・・・？」

「俺は、笹山の事が好きで好きでたまらなくて。でも顔や目を合わ

せる事が物凄く恥ずかしくて・・・。こんな経験始めてだったから
どうしたらいいのかわからなかったんだ。」

「!!--!」

相当驚いたようだ。

あの時と同じように笹山の瞳から次々に涙があふれ出てくる。

「誰よりも笹山の事が好きだ。

俺と・・・付き合って下さい。」

ようやく言っ事が出来た。

これが俺の正直な気持ち。

今まで何なのかわからなくてもややもやしていた気持ち。

笹山の目を真剣に見つめる。

背けたり逸らしたりなんてせずに。

口を片手で抑えて涙を流し続けていた。

笹山は震える口を必死に動かしながらゆっくり、はっきりと答えを出す。

「私も・・・私も先輩の事がずっと大好きでした・・・でも、本当に私なんかでいいんですか・・・？」

そう俺に問いかけるとそのまま号泣してしまう。

俺は少し俯き、慎重に言葉を選んで口に出す。

「・・・笹山だからいいんだよ。俺は笹山がいいんだ。代わりなんていない。」

この言葉を発した瞬間、笹山は力が抜けたようにその場に座り込んでしまった。

「本当に・・・本当にありがとうございます・・・よ、よろしくお願ひします・・・」

ところどころに咳やすすり泣きが入りつつも丁寧に答えてくれた。

「こ、こちらこそよろしくお願ひします。ありがとうございます・・・」

頭の中が混乱して今の状況をうまく掴めない。

(これはOKなのか・・・？ とりあえず慰めてあげないと・・・)

そう思い、俺は手を差し伸べる。

「ずっと辛い思いさせてごめんな。さ、立ち上がれるか？」
「ぐすつ・・・すみません・・・」

俺の手をしっかりと握って立ち上がる。

「ほら、これ使っていいから。 もう泣くなつて。」
微笑みながらポケットからハンカチを取り出しそれを手渡した。

優しくしたつもりだったのだが笹山は余計に泣き出してしまった。

そしてハンカチを受け取ったほんの一瞬の出来事だった。
俺はバランスを崩し、倒れそうになる。

気づくと笹山が俺の胸でわんわんと泣いているではないか。

この状況にどうしたらいいのかわからずあたふたするばかり。

でも、そんな笹山の事をとていとおしく思った。

俺は笹山の事を軽く抱きしめながら

「本当に・・・ごめんな・・・」

そう呟いていた。

笹山は思っていた以上に小さくほわほわした感じで例えるならば羽毛布団のようだった。

もしかしたら例える事など出来ないかもしれない。

そんな不思議な感覚だ。

しばらく泣いていたがようやく泣き止んでくれた。

「じゃあ、そろそろ帰るか？」

「はい・・・服、グチャグチャにしちゃってごめんなさい。」

「気にしないでいいんだよ。後、敬語も使わなくていいよ。」

「うん、わかった・・・」

照れくさそうにそう言つと俺も照れくさそうに言つ。

「じゃ、帰ろ？ 香織。」

「うん！」

ようやく元気な笑顔を取り戻してくれた。

互いに微笑みあうと手を握り締め、帰路に着く事にした。

第十一話：告白（後書き）

とうとう告白しちゃいました（笑）

次はある矛盾を解決したいと思います。

第十二話：二人きりの帰り道

隣に笹山がいて手を繋いで一緒に帰っている。

しかも二人きりで。

まるで夢みたいな状況。

先ほどよりだいぶ頭が直ってきてようやく歓喜の喜びをかみ締める。

（やった！ OKしてくれたんだ！）

心の中でガッツポーズを100回くらいしただろう。

顔は真っ赤つかで沸騰したヤカンみたい。

心臓は破裂寸前。

繋いだ右手から温もりが伝わってくる。

細くてちよつと冷たいちつち々な手。

遊園地以上に緊張して歩く時に手と足が一緒に出てしまいそうだ。

・・・そんな事を考えていると本当にそうだった。

「あ、手と足一緒に出てる！ 面白ーい！」

思いつきり笑われてしまった。

最近、かつこ悪いとこばかり見られてしまっている。

（・・・やっぱり泣いてるより笑ってる方が絶対可愛いよなあ。）

思わず笹山の顔をじーっと見つめてしまう。
今なら翼の気持ちがよくわかる。
するとそれに気がついた笹山が顔を赤らめて言う。

「せ、先輩！　そ、そんなにじっと見つめられると恥ずかしいよ・・・」

「ごめんごめん。でも目、見て欲しいんだろ？」

「そ、そうだけど・・・」

「じゃあいいじゃん！　なっ？」

「い、今はそんなにじーっと見つめる時じゃないですか！　また何か考えてたの？」

少しからかってみた。

必死に反論してくる。

まだ先輩のなごりが消えなくて時々敬語になるのも面白い。

（俺だっつてじっと見つめるの、かなり恥ずかしいけどな・・・）

「・・・さ、笹山やっぱり可愛いなって。」

調子に乗ってつい言ってしまう。

まあ、ふざけて言えるほど人間が出来てないから俺も顔真っ赤だけど。

「！！　先輩！　い、いきなり・・・」

あたふたして慌てて顔を隠す。

「ご、ごめん・・・」

二人してりんご病にでもかかったみたいに顔が赤い。

慌てて顔を赤らめる姿も可愛い。

（・・・まずい。翼と同じになりそう・・・。）

けどそんな事言っただけ可愛いもんは可愛いのだから仕方が無いか。

「・・・た。」

「へっ？」

うまく聞き取れなかったので聞き返すが思わず間抜けな声が出てしまう。

「で、でも先輩に言ってもらえて嬉しかった・・・」
俯いて視線を下に落としたまま笹山は答えた。

「・・・」

（本当にやばい！　ここまま死にそう！！！！）

お互いに真っ赤にした顔を下に向けながらゆっくりと歩く。
無言のまま。

少しの間、沈黙が続いたがさすがにダメだと思ったので俺が話題を持ちかける。

「あのさ、翼にプロフのURL教えてもらってたんだ。」
「えっ？」

「そ、そこに好きな人の事が書いてあつて・・・」

聞いちゃいけない、と歯止めをかけようとしたが遅かった。

「あ、あれは・・・。」

何かを言いかけて口を噤む。

「あれは？」

歯止めがきかない。

「・・・クラスの子に『斉藤先輩の事、好きでしょ?!』ってしつこく聞かれ続けてて思わず適当に書いたんです・・・」

この事でかなり凹んでいた俺はなんだっただろう。

あれだけ泣いてしまったのがアホらしく感じる。

「そっか、あれ結構・・・で、でも!」

大きな声で遮られてしまった。

「本当は入部した時くらいからずっと先輩の事が好きで・・・だから先輩が告白してくれたのもすごく嬉しくて・・・」

まさか・・・。

まさか笹山の口からこんなことが聞けるとは思わなかった。

全然そんな素振り見せなかったのに・・・。

「あ、ありがと・・・」

「じゃあ、家ここだから・・・送ってくれてありがとうございます。」

話しているうちに笹山の家に着いたようだ。

まだ敬語が抜け切らない。

当たり前か。

「あ、そっか。じゃあまた明日な！」

俺は大きく手を振ると自分の家へと帰った。

（あと姉貴と翼にも言わないとな）

「ただいま！ 姉ちゃん？！」

ドタバタと家を駆け回り姉貴を探す。

「何？ もう少し静かにしなさいよ。で、どうしたの？ 大会で勝った？」

寝ていたようで目を軽く擦りながら言った。

「ごめん。勝ったよ、後・・・」

「後？」

「・・・笹山に告ってOKしてもらった。」

姉貴は眠気覚ましにコーヒを飲んでいたが思わずむせてしまう。

「ゴホッ！　う、嘘・・・よかったじゃん！！」

「うん、告ったらいきなり抱きつかれて大泣きしちゃって・・・」

また姉貴むせてしまい、さっきよりもひどくなる。

「ゴホゴホゴホホッ！！　あ、あんた・・・」

とりあえず早めに夕食と風呂を済ますと遊園地の事から先ほどのことまでを淡々と説明していく。

「りゅ、竜・・・　あんた、凄すぎるよ。」

「そうなの？」

いまいち実感が湧かない。

確かに告白してOKしてもらった事はよかったけどそんなにすごい事なのか？！

「だって遊園地のシチュエーションといい告白のシチュエーションといい・・・完璧じゃない！　私もそんな恋を試みたいなあ。」

（よくよく考えたら好きな子が自分の事を前々から好きだった、な

んてあんまり無いよな。）

またしても心の中でガッツポーズをしまくる。

「顔、にやつきすぎだって。さ、もう子供は早く寝なさい。疲れてるんだし。」

「わかったよ、じゃおやすみ。」

自分の部屋へ行き、寝る事にした。

第十二話：二人きりの帰り道（後書き）

ちよつとアイデアが不足してきてます（汗
今後の展開がどうなるかまだわかりません。

温かく見守ってくれと嬉しいです（汗

第十三話：数日後・・・

そして、二週間が経った。

比較的いつもと同じような毎日。

ただ、今までと違う少し進歩したこともあった。
ようやく顔を見て話せるようになってきたんだ。

今までは本当に真下を見てて。

笹山のスニーカーを見つめながら話してた。

今思うとすごく変な格好だ。

それが唇のあたりを見れるようになってきたのだ。

自分の中では大きな一歩。

・・・ちゃんと目を見て！ってもう一度注意されたこともあったけど・・・。

（目はホント無理だって・・・）

どんなに頑張っても鼻の付け根のあたりまで。
たまに意地悪でいきなり顔を低くされ無理やり視線を合わせさせら

れると本当に慌てる。

「もうっ！ そろそろ慣れてよっ！」

と膨れっ面で言われるのが最近の日課。

それを翼と筒井にからかわれるのも最近の日課。

笹山はだいぶ慣れてきたのか目をきちんと合わせようとしてくる。

まだ顔は赤くなったりしてはいるが。

俺がきちんと目を見て話せるのはいつになることやら・・・。

（告白した時はきちんと目を見て話せたんだけどなあ・・・）

といつも心の中で嘆くが何も変わらない。

ちなみに翼と筒井に俺たちが付き合い始めた事をきちんと報告した。本当はその事だけを簡潔に話すつもりだったが告白の仕方やその他諸々も話す羽目になってしまったけど。

話した時は本当に大変だった。

部室で翼と筒井だけ呼んで話したのに話した途端、急にお祭り騒ぎ。なんと部員全員、影に隠れて俺たちの報告を盗み聞きしていたのだ。

驚いた事に笹山が俺の事を好き、という事は一年全員知っていて。俺が笹山の事を好き、という事は二年全員が知っていた。

まあ、犯人はあの半分バカッフルになりかけている二人しかいないと察したが。

そんなわけでもいつも俺たちがくつついたら面白いのに、と話していたらしい。

そして大会の日、俺が笹山を呼び出した事で告白して付き合い始めたこと確信したそうだった。

誰にも見られないように呼んだはずだったのだけど……。

それにこれで俺がフラれてたらどうするつもりだったのだろうか。

翼は俺の性格上、付き合う事になったら報告してくると先読みしていて。

それを部員に伝えて二人でこのことを報告してきたらみんなで祝おう、というサプライズをしようという事になったようだ。

見事に俺は翼の策略にはまってしまった。

筒井も筒井でやる気満々だったらしく、顧問のいない日をわざわざ調べたりお菓子や飲み物の買出し長のような役目を果たしたと言っていた。

そこまでして……と少し呆れてしまったのは黙っていた。

最初は俺も笹山も少し不機嫌にみんなの祝福をうけていたが、次第に楽しんでいった。

確かに冷やかしかはうざったかったけどたまにはドンチャン騒ぎをするのもいい。

それに一応、大会の祝勝会っぽい雰囲気もあったし。

（どうせだったら祝勝会をメインにしてくれば良いものを・・・。
）
ぶつくさと文句を言っていたら軽く注意されてしまった。

「先輩、こうなったら楽しみましようよ？　ね？」

優しく諭されて少し顔を赤らめていると全員から冷やかしを入れられた。

これはもう一種のいじめにはならないのだろうか？

「ああもう！！　お前たち明日300m30本やらせるぞ！！」

手を振り払うように笑いながら大きな声を出す。

するとあちらこちらから「それはナイっすよ」「無理！」などと聞こえてくる。

極めつけが「彼女さんからもなんとか言ってお下さいよ？」だと。

（からかうのもいい加減にしようよ・・・。）

うな垂れているとみんなから爆笑の渦が巻き起こった。

とにかく飲んで食って騒ぎまくった。

部室が汚すぎるとまずいので適当に掃除してからファミレスに移動したりした。

かなり迷惑な客だったであろう。
一応店員の人には出る時に「うるさくてすみませんでした」と言っておいた。

そんな感じでその日はずっとみんなで遊んでいた。
まったく、良い仲間なのかおかしい面子なのかわからない。

これで地区大会は終わり。

県大会は後、一ヶ月後。

一日目は俺の400mと翼の100m。

二日目は笹山と筒井の200m。

後、リレーでも県に行った。

自分の種目の事で頭が一杯でリレーは走った事すら忘れていた。

後々思い出したのでかなり自己嫌悪が激しかった。

一ヶ月でどれだけ成長できるのか。

そこにかかっているんだ。

出来るかな？　じゃなくて。

出来る、そしてやらなければいけないんだ。

第十三話：数日後・・・（後書き）

飛んでしまつてすみません^^;

最近どうしても都合が合わなくて（汗

ここからは県大会モードに入っていきます。

「決意」のあとがきでは終盤、と書いたのですがもう少し続けたい
と思います（笑）

第十四話：夢から現実へ

「目指すは全国大会だな。」

気づくと目の前に翼が立っていて真面目な顔で言い放つ。

「全国大会に行くためには「標準記録」を突破しなきゃね。」
笹山がいつもの笑顔で微笑む。

男子1000mの標準記録は11秒30。

現在、翼の持ちタイムは11秒62。

たった0'32秒。

されど0'32秒。

この微妙な数字を伸ばすには途轍もない努力がいる。
記録だつてずっと右肩上がりなはずがない。

特に1000mの場合、ほとんどが己の才能の世界。

女子2000mの標準記録は26秒24。

今、笹山の持ちタイムが26秒44。

筒井の持ちタイムが26秒72。

二人は今行けなくても来年がある。
もちろん今年行けるのに越した事は無いが。

俺の400mの標準記録は52秒14。
この間出した自己ベストは52秒38。

「みんな・・・全国に手が届くレベルなんだね・・・」
神妙な面持ちで筒井が言う。

そうだ・・・もう夢じゃないんだ。
絶対に、絶対にみんなで全国に行くんだ。

俺はそう決めた。

その途端、なぜだか頭に痛みが走る。

ハッと気がつくところには教室の自分の席。

クラスのみんながゲラゲラ笑っている。

前の席の翼も机に突っ伏していたが叩かれた。

頭の痛みの正体は英語の先生が振り下ろした教科書の角。
どうやら日頃の疲れで授業中にも関わらず俺と翼は爆睡していたらしい。

一日の最後の授業で眠くならない人などいるのだろうか？

（今は夢か・・・）

叩かれた頭を押さえて目をこする。

「斉藤、片桐ー。俺の授業で居眠りとは良い度胸だなー・・・罰として問題！」

俺も翼も二人で顔を見合わせている。

「Which is faster・Tsubasa or Ryuji?」

「早く言えた方は今の居眠りはチャラだから。」

ニヤニヤと笑いながら俺らに言った。

「I think Tsubasa is faster than Ryujin.」

翼に先を越された。

しかも日本語に直すと俺より翼の方が速いって事になるし。
(こういう時は普通相手を上に持つてくるでしょう！)

心の中でツツコミを入れた。

「お見事！ 片桐はチャラ。 斉藤はそのまま減点！」

「そ、そんな〜・・・ひどいっすよ〜。」

またクラスに爆笑の渦が巻き起こる。

教科書で叩かれるわ笑いものになるわ減点されるわ・・・。

まさに踏んだり蹴ったりだ。

気分がどんよりとしたまま授業は終わった。

（英語は嫌いだし翼より早く答えるなんて無理だって・・・）

噂をすれば、本人が寄ってきた。

「悪い悪い！ 思いついたのがあれだったからさ！」

「お前よ・・・普通相手を上にして言うでしようが。」

俺は恨めしそうな目で翼を見る。

「そんなに怒るなって！ そうそう、今日四人で帰らないか？」

「え？」

「綾香にはもう言ってるからさ、多分笹山も知ってると思う。」

「あ、香織が良いならいいけど・・・」

まだ本人を目の前にして名前呼びは辛いが、本人がいない時は名前
で呼ぶようになった。

「じゃ、決まり！ 校門の前で待ち合わせな！」

翼はそう言つと教室を出て先に外へと向かう。

しばらく俺はポカーンとしていたが慌てて鞆を手を取った。

「お、おい！　ちょっと待てよ！」

そう言っただけ俺も校門へと急いだ。

第十四話：夢から現実へ（後書き）

なんか、この小説って帰り道多いですね（笑）

書きやすいんでそうなってしまうのですが^^;

標準記録は新潟県のものを使わせて頂きました。

ちなみに標準記録を突破しないとたとえ一位であっても全国大会には行けないのです。

第十五話：仲良し四人組

夕日で赤く染まる校庭。

みんな足早にそれぞれの家へと帰っていく。

俺と翼はそんな夕方の様子をぼーっと見つめて二人を待っていた。

「・・・来ないなあ。」

俺がそうつぶやく。

「そうだな、そろそろ来てもいいと思うけど・・・」

二人で目を凝らして昇降口のあたりを探した。

「いた！」

俺が指差して叫ぶ。

好きな人を待つてる時はどうしてこんなにも長く感じるのだろうか。

「遅れてごめん！ 先生の話、長くって・・・」

筒井が両手を合わせて謝ってくる。

香織も息を切らして謝ってきた。

「ごめん！　すぐに行きたかったんだけど・・・」

深く追求せずに許してあげた。

あ、ちなみに。

笹山のこと、名前呼びで呼ぶようになったんだ。

・・・というかそう言われた。

俺がいつものように「なあ、笹山？」と呼んだ時だった。

香織は振り向くとなぜかしよぼんとしていた。

「どうした？　具合でも悪いのか？」

「うつん、先輩。・・・これからは名前で呼ばない・・・？」

「えっ・・・？」

「あつ、べ、別に嫌ならそれでいいんだけど・・・。」

名前で呼ぶ、なんて考えた事が無かった。

翼たちはいつもキャツキャと名前で呼び合っているが、自分もあなるのか？

「い、嫌じゃないけど。」

「じゃ、じゃあ。名前で呼ぼう？・・・竜二。」

「わかった。・・・香織。」

この日、俺たちは手をギュッと繋いだまま何も話せずに帰った。

この瞬間は今までドキドキした中でもトップ5に入るくらいドキドキした。

一位はダントツで告白した瞬間。

二位は観覧車の中で二人きりで隣になったとき。

三位はお化け屋敷でいきなり手をつながれた瞬間。

四位は・・・色々ありすぎてわからない。

まあ、とにかく。

それくらいの衝撃だったという事だ。

そんな風に考え事をしているといつの間にか公園にいた。

「竜二！ お前なんですつとボーッとしてるんだよ！」

翼に怒られてようやく気がついた。

学校から少し離れた広い運動公園の中の休憩スペースのような場所。

「あ、ごめん・ちょっと考え事してた。」

「部長！ こんな時に考え事してちゃダメですよ。」

筒井の甲高い声が耳に突き刺さる。

「悪い悪い！ 県大とか色々、な。」

「変な事でも想像してたんじゃないの？」

翼が目細めてニヤニヤと言う。

「ば、馬鹿！ んなわけないだろ！」

「はいはい！ 下ネタ禁止！！ 先輩も考えるなら家で！」

「つて、お前もかよ！！！」

俺たちのやりとりを見て香織はクスクスと笑っている。

「それは置いておいて・・・竜二、前に渡した笹山のプロフ、見たか？」

「はっ?!」

「いやいや、だから笹山のプロフ。」

「・・・」

「大丈夫だって！ちゃんと本人に了解を得て竜二に渡したんだから。」

「・・・見た。」

いきなりこいつは何を話すのかと思った。

「あの時に俺、笹山の事可愛いつて言ったよな？　どう思った?？」
「どう思ったって・・・」

こいつ、本当に馬鹿か？
本人がいる前で言えと？

筒井も知っていたようで興味津々に見つめてくる。

香織も知りたいような知りたくないような、と言いたげな顔をしていた。

プロフの事は香織にも話したけど・・・。

「いいからいいから！ 早く！」

翼が急かす。

「・・・メツチャ凹んだ。」

「なんで??？」

すかさず翼が追求してくる。

「あの時、翼にはム力つくようななんとなく悲しいようなそんな感情が芽生えた。・・・プロフ見たとき、同学年に好きな人いるって書いてあったから凹んだ。」

翼と筒井が顔をあわせてニヤッと笑った。

「あのな、あれ。俺と綾香が竜二はどう思っかなーって試したわけ！」

「・・・はあああ?!?!」

「俺が笹山の事を可愛いって言えば、竜二も嫉妬するかなーって。」

まったくこいつらは・・・。

というかそのころから付き合ってたのかよ。

全然気がつかなかった。

「いや、あれは嫉妬じゃなくて・・・。」

こいつらの手の上で踊らされていた事を認めたくなくて必死に反論する。

「いやいや、そんな感情の事を『嫉妬』って言うの。」

「先輩、香織が他の一年の男子と仲良さそうに話してるとなんか変な気持ちになりませんか？」

「・・・。」

「そういえば一年の男子で香織の事が好きっていう子が・・・」
「ちょよ、ちよっと！綾香！！」

香織が困ったように一生懸命遮ろうとする。

（俺の他に香織の事が好きな奴が・・・？）

胸の奥から湧いてくるこの気持ち。

なぜかその誰だかわからない男子にムカついた。

「竜二、今その一年にムカついただろ。それが嫉妬。わかった？」

嫉妬、か。

「でも、香織よかったね！　それだけ好かれてるって事じゃん！」
「・・・うん。」

香織は少し俯きながら微笑んだ。

その照れながら微笑む姿にしばし見とれていた。
もう翼のようになっていいるのかもしれないな。

「じゃ、遅いしそろそろ帰ろ？」
そう、筒井が言った。

そしていつものように家へと帰った。

夜。

俺はベッドに寝っころがって漫画を読んでいた。

静かな俺の部屋に携帯の着信が鳴る。

メールだ。

「今日は楽しかったね！ それに・なんか嬉しかった 私も竜二が他の子と話してたら嫉妬しちゃうかも・・。ちなみに私は竜二一筋だから安心してネ！（笑） 県大までもう少しだけど怪我しないように頑張ろ！」

素直に嬉しかった。

意識しなくても頬が緩む。

ずっと不安だった先ほどの事が一気に消え失せる。

早めにメールに返事をした。

その後、自然に手が動き「保護」の所にカーソルを合わせボタンを押していた。

（本当に香織と付き合えてよかった・・・）

改めてそう思っただけであつた。

第十五話：仲良し四人組（後書き）

更新遅れてゴメンなさい（汗

なるべく水曜日・土曜日に更新できるように頑張ります^^；

ちなみに最初のころの「可愛い」は一応伏線って事で（笑）

第十六話：新たな課題

県大会まであと2週間に迫ったある日。

「コラッ！！ 三月！ 日高！ テキパキ動け！」

「はい！ すみませんっ！！」

バトンパスの練習中である。

今、怒られてるのは三月廉太郎。
みつぎれんたろう
それと日高怜。
ひだかれい

二人ともリレーメンバーだ。

一年なのに二年を差し置いてリレーメンバーに選ばれるほどの逸材。

リレーメンバーは四人。

400mリレーだから一人100m。

一走は三月。

こいつはスタートダッシュが部内で一番速い。
俺や翼でもスタートではこいつに勝てない。

いわゆる「天性の才能」らしい。

それを生かして100mをやっている。

完璧な前半型の走り。

まったく羨ましいものだ。

二走は翼。

先生曰く二走は大抵どの学校もエースが走るらしい。

ここでも翼の方がエース扱いなのが少し癪だけど。

タイム的にはあまり大差ないのに・・・。

まあ、コーナー走がそんなにうまくないってのもあったらしいけど。

三走は俺。

俺は翼とは正反対でコーナー走の方が得意だ。

昔、俺も1000mをやったが三月みたいな爆発的な瞬発力は無かった。

その上走り終わった後に少し余裕が出来てしまう、そんな中途半端な走りだった。

そこを先生に指摘されて400mに転向したっけ。

アンカーは日高。

こいつに加速走をやらせたら俺も翼も追いつけない。

部内で多分、加速が一番うまい。

専門の200mでもスタートして50m付近からかなり加速する。
典型的な後半型だ。

この4人の面子で県に挑む。

ちなみに今は三月と翼が合わせている最中だ。

「よいい・・・はい！」

スターターの一年が合図をして三月が走る。

こいつのスタートを見てると呆気にとられる。

あっという間に翼がつけたポイントの所まで走ってきた。
翼が走り始める。

「はいっ！」

掛け声とともに翼が手を出し、バトンが手に渡る。
そのまま翼が駆け抜ける。

「翼！ タイミングはバッチリだけど手、もうちょい上の方が安定
すると思う。」

「ああ、わかった。三月、悪いな。」

「いえいえ！ 全然大丈夫ですよ！ じゃ、部長と怜も・・・」
「そうだな。竜二、俺らは一度見てるよ。」

そう言う翼は俺にバトンを手渡す。

スタート地点に行くとスタートの指示が出る。
「位置について。よいい・・・はい！」

バツと飛び出す。

学校の校庭は一周200mなのでカーブがキツイ。

かなり体を傾けて走らなければならない。

が、俺はとりあえず難なくこなす事が出来た。

そして日高がつけたポイントへと足を踏み入れる。

目の前の日高が走りだした。

日高の背中を追いかける。

（もう少し、もう少し・・・今だ！）

「はいっ！」

日高が手を伸ばすが届かない。

（くそっ！ 早すぎた！）

結果、バトンはうまく渡らなかった。

試合でこうなってしまったらテイクオーバーゾーンで失格になってしまう。

「竜二ー。声出すのが少し早かったな。もう少しだけ遅らせていいと思うな。」

「ありがとう。日高、ごめん！」

両手を合わせて平謝り。

「いや、いいっすよ。俺ももうちょっと合わせますんで・・・。」

こうして何度もバトンプスを繰り返した。

新たな課題が出来た。

この課題を早くクリアしなければ。

俺はもう一度気持ちを入れなおしてスタートに立つのであった・・・。

第十六話：新たな課題（後書き）

バトンパスです。

テイクオーバーゾーンとはバトンゾーン（バトンをこの中で渡さなければならぬ）から出てバトンが渡った場合、失格となります。

本文、短くて申し訳ないです（汗

第十七話：波乱の予感

あれからバトン練習を日が暮れるまでやった。

合計で何本やったのかわからない。

でも、ようやく先生からもOKを貰えるバトンパスをする事が出来た。

俺と日高のところが全然うまくいなくて大変だったけど・・・。

こういう細かい合わせは苦手で俺がミスしてばかりだった。

それなのに日高は文句一つ言わずに付き合ってくれた。

あれが他の奴だったら確実にキレているだろう。

本当に感謝している。

あいつの性格が黙々となんでもこなす性格でよかった。

「お疲れ様です！」

「お疲れです。」

三月の大きな声と日高の低い声が聞こえた。

あれだけ走ったのに三月はなぜこんなにも元気なのだろうか・・・。

「お疲れさん。じゃあな。」

翼はもうクタクタのようで適当な挨拶しかなかった。

「お疲れ！ 日高、最後まで悪かったな。じゃ！」

日高に謝り、俺も翼の後を追う。

みんな一生懸命取り組んでいたため、もう部活終了時刻は過ぎ既に辺りは暗くなっていた。

香織に途中で先に帰るように言っといったほど。

あまりのんびり帰宅していると夕飯抜きにされてしまいそうだったので翼と一緒に足早に家に帰った。

「ただいまー。飯は？」

「はいはい、出来てるわよ。」

家族みんな夕食は食べ終わっていたようだ。

腹が減りすぎて死にそう。

俺はカレーを3杯平らげるとすぐに風呂へと入った。

その早さと量にみんな驚いていた。

（まあ、山盛り3杯を25分たらずで食べたなら驚くよな。）

風呂もさっさと出た。

早めに寛ぎたいのだ。

急いで自分の部屋へと向かった。

床にあるクッションに座り、コンポの電源を入れた。
大音量で流すと姉貴に怒られるので音は小さめだが。

座っていたクッションを枕にして寝転ぶと携帯を手取る。

「新着メッセージ2通」

液晶画面にそう表示された。

一通目は香織から。

「バトン練習お疲れ様！ リレーメンバーはやっぱり速いね！ バトン、うまくいった？ 疲れてるなら返事無くても平気だよ！」

ねぎらいの言葉だ。

疲れている時に好きな人からこんなメールを貰うと疲れが一気に吹き飛ぶ。

（香織からのメールなんだから疲れてたって返事するって。）

そう、心の中で密かに思いながら文章を考える。

「ありがと！ バトンは最後はOKもらえたよ。それまでかなり時間かかったけど……。全然心配しなくて大丈夫！」

何度か誤字・脱字が無いか確認して送信ボタンを押す。

二通目は筒井から。

「明日って何時集合でしたっけ？！（汗 あと、今日は香織が寂しそうにしましたよ？（笑）」

筒井らしいメールだ。

集合時間を忘れてるところがあいつらしい。

しかもメールでもからかってるし。

とりあえず、集合時間を書いて最後に「ばーか」と入れて送信しておいた。

しばらく漫画を読みながらくつろいでいるとまた携帯が鳴った。

だがメールでは無い。

（電話・・・？）

「もしもし？」

「あ・・・いきなりごめんね。今、大丈夫？」

電話の主は香織だった。

向こうから電話が来るのは珍しかったのでかなり驚いた。

「大丈夫だよ。ちょうど暇だったし。」

俺も香織も某携帯会社の人気プランを使っているためこの時間帯なら無料で通話出来る。

携帯の料金は俺の場合、基本料以外は自腹なので注意しなければならぬ。

「よかった！ あ、メールでも言ったけどお疲れ様！」

「ううん、ちょっと疲れたくらいだから平気。」

未だにどこかぎこちない話し方になってしまふ。

なぜ翼や筒井の時のように話せないのだろうか・・・。

「そっかあ。寝たくなったら言ってね！ いつでも切るから！」

「ああ、ありがと。でも・・・。」

「ん？　どうかしたの？」

「香織と話していたいなあーって・・・。」
つい、本音が出た。

こんな事を大っぴらに言っちゃって平気なのか？
なぜか言っではいけなかったような気がしてきた。

少しの間、香織は黙り込んでしまった。

「ありがと・・・私もそうだよ・・・。」

電話ごしだが顔を赤くして下を向いている香織の姿が想像できる。
言ってしまった俺自身も恥ずかしい気持ちで一杯になった。

「あ、いや、その・・・なんていうか・・・。」

思わず慌ててしまう。

お互いに黙ってしまった。

電話での沈黙は一番気まずい。

「あ、あのね。実は・・・。」

香織が沈黙を切り裂いた。

「ちゃんと言っておかないといけない事があって・・・。」

俺はなぜだかすごく嫌な胸騒ぎがした。

第十七話：波乱の予感（後書き）

なんとか二日連続更新できました。

これからもう少し更新出来るように努力します^^；

第十八話：予想的中

「言わないといけない事・・・？」

なんだろう。

聞いちゃいけないような聞いておかないと後悔しそうなそんな感じ。

「あ、でも私がそう思うただけけど・・・。」
「いいよ、言って？」

大きく深呼吸をして覚悟を決めた。

「あ、あのね、今日・・・。」
「今日どうかしたのか？」

あまり追求したくなかったがつい突き詰めてしまつ。

「・・・告白されたの。」

「・・・。」

告白？ 誰に？

頭が真っ白になっていく。

香織を取られてしまうようなそんな不安に襲われた。

「誰に？」

一つ一つ整理しながら聞いていく。

香織は一呼吸置くとゆっくりと話す。

「・・・三月君。」

三月？

あの三月か？

そんな素振りはまったく見せなかった。

さらに思い出してみるといつもより明るかった気もする。

「え、けど三月は俺たちとずっとバトン練習してたよな？ いつ？」

俺の少ない知識の中では告白、というものは放課後とか何かの行事が終わった後だと思っていた。

「今日の部活が始まる前に呼び出されて・・・そこで・・・」

あまり香織を追い詰めるような事はしたくない。

けど、けど・・・。

「で、でもちゃんと断ったよ・・・？ 私、付き合ってる人がいますって。きちんとごめんなさい、って・・・。」

三月の印象は軽そう、俗に言う「チャラ男」タイプだった。
あんな奴に香織を渡したくない。

三月に対して理不尽な怒りがこみ上げてくる。

「・・・。」

俺は黙ったままだった。
何も言う事が出来なかった。
携帯を持つ手が震えてくる。
それが怒りに打ち震えていたのか悲しさがこみ上げてきたのかはわからなかったが。

「そう言われてどう思った？」

怒りにまかせてつい、意地悪な質問をしてしまう。

「気持ちは嬉しいけど、やっぱりダメだって・・・。」

「・・・嬉しかったのか・・・。」

後々考えればごくごく普通の受け答えなのだが、この時点で俺の思考はおかしくなっていた。

そして、俺は一番危ないボタンを押そうとしていた。

「お前、三月のこと・・・お願い!!」

言いかけたところで大きな声に遮られる。

「三月君の事はなんとも思っていないから・・・私が好きなのは竜二だから・・・お願いだから私の事、嫌いにならないで・・・？」

携帯を通して聞こえてくる声が徐々に涙声になっていった。

香織の泣く声とこの言葉を聞いてようやく怒りが収まる。
寧ろ、香織の事を信じていなかった自分に腹が立つ。
それと同時に香織に対してとても申し訳ない気持ちで一杯になった。

「ごめんな。俺、それ聞いた時にとっさに香織が三月の事を好きになっちゃうかも、って思っちゃって・・・。香織の事、本当に信じられてなかった。信じてたらこんな事思わないもんな・・・。本当に、本当にごめんな・・・。」

精一杯の謝罪の念を込めて謝った。

本当に悪い事をしてしまった。
なぜ俺はいつも自分で自分の首を絞めるような事ばかりしてしまう
のだろうか・・・。

「ありがとう・・・わ、私の言い方が悪かったの・・・。」
「いや、俺が勝手に思い込んで・・・だから香織は何も悪くないよ。俺も香織の事が好きだから・・・本当にごめん。」

香織がすすり泣くのが電話越しに伝わる。

「泣かしちゃって本当に悪かった。でももう泣くなって。ほら、な
？」

「だって・・・だって・・・竜二のばか・・・。」

俺はまたしてもあたふたするばかりであった。
なんとかして機嫌を直してもらわないと・・・。

（そうだ！）

「香織？ ちょっとベランダ出てみ？」
「ぐすつ。何・・・？」

俺もガタガタとベランダへと出る。

「ほらっ。上見て？ 星、綺麗だよ。」

空にはいつもよりも多く星が光っている気がした。

「わぁ・・・綺麗だね・・・」

「あの一番明るく見えるのがシリウスとプロキオン。で、三つ並んでるのがオリオン座。見える？」

「あつた！ 綺麗・・・」

さっきまでの涙ぐんだ声は消え、楽しそうな声が聞こえてきた。
(よかった・・・機嫌、直ったみたいだな。)

「あ、寒いからあつたかくしろよ？ 風邪とか引くなよ。」

「もう！ ちっちゃい子じゃないんだから！ ふふっ。」

俺、そういえば薄着のまま出てきちゃった。
結構冷えるな。

「さ、そろそろ中に入るか。風邪引くぞ？」

「だからちっちゃい子扱いしないの！」

（気遣いのつもりだったけどうつとおしかったかな。）

「香織・・・？」

「ん？」

「俺、これからちゃんと香織の事信じる。隠し事もしない。約束する。」

「・・・うん！ 約束だよ！」

そう固く誓い合った。

「じゃあ、眠いから寝てもいい？」

「あ、ごめんね！ おやすみ！」

「おやすみ！」

電話を切る。

通話時間、3時間。

こんなに長電話したのは初めてだ。

こうして波乱の幕は閉じた。

もっと・・・香織の事を信じないと・・・。

出来ているようで出来ていない、そんな事を思い知らされるのであった。

第十八話：予想的中（後書き）

最近、すごくベタなセリフになっている気がします（汗
もしも類似表現などありましたら大変申し訳ありません。
言って下さればすぐに修正致しますので・・・。

第十九話：待ってましたよ春スキー。

暖かな日差しが燦燦と照りつける。

この時期なのになんでこんなに暑いんだ。

4月になったばかりだというのに。

俺たちの県は少し変わっていて他と時期が違う。
なぜか4月の終盤あたりに県大会がある。

もちろん全国の日には他の県と同じ。
未だにこのシステムは理解できない。

第一、陸上の試合期は大体4～10月あたり。

普通なら今の時期には市大会があつて7月くらいに県大会があつて、
つていう流れなのに。

お偉いさんが頑固な人らしくてここだけは譲れないそうだ。
毎度毎度よくわからないポリシーを持つ人だと思う。

県大会まではあと約二週間。

このままの調子で行けば、ベストで行けるだろう。

俺は昔から本番には強い方だった。

というかあれほどの緊張感が無いと持てるすべての力を出し切る事が出来ない。

自分では真面目に走っているつもりでも手を抜いているように見える時があるらしい。

まったく困った部長である。

まあ、とりあえずそれはおいといて・・・。

明日から三日間、学校全体で行事がある。

みんなで春スキーをするそうだ。

三年生はもう卒業しちゃったから一・二年だけで。

冬のシーズン中に行かないのには訳がある。

まずは混んでるから。

だからあえてシーズンが終わってから人工雪の所でやるらしい。

もう一つは昔は普通に冬にやっていて。

その時に急に吹雪いてきて、一人雪山に取り残されて。

結局そいつは行方不明のまま発見されず・・・。

警察とかがかなり動いて大事になったらしくホテルの人やスキー場に迷惑をかけてしまった。
そのおかげで毎年使っていたそのホテルやスキー場からもお断りされてしまうから。

という噂がある。

あくまでも噂だけどやけにリアルな噂。

この事件があつてから吹雪く可能性が少ない春スキーに変更した、と聞けば辻褄も合っている。

よくよく考えればそんなに大きな事件があつたのならスキーなど中止になると思うけど。

まあ、色々と言いつきの春スキーだけど結構楽しい。

学校全体の行事だから去年も行ったがまったく滑れなかったのにだいぶ滑れるようになった。

斜面が急なところもかなり怖かったけど、コツを掴めば平気だった。

数日間で自分が上達している、という実感が得られるため生徒には人気だ。

今日は翼と一緒にスキーの時のお菓子の買出しだ。

たまには男二人で行かないか？　という事になってこうしている。

お菓子を持っていくのは一応規則違反ではない。

バスの中で退屈だ、という意見を実行委員が取り入れ「お菓子タイム」というものを作ったそうだ。

「竜二ー。これどうかな？」

翼が棚から持ってきたのは最近はやっているスティック状のガム。

「うーん、買つとけば？」

「わかった。あと、みんなで食べるからポテチは欠かせないしー・・
・。」

一生懸命にお菓子選びをしている翼をよそに俺はブラブラと商品を眺めていた。

正直に言うともあまり俺はお菓子を食べない方。

甘いのも苦手。

チョコレートとかホント無理。

みんなから驚かれることだ。

糖分が足りないから頭も働かないんだろうけど。

某漫画に出てくるメチャクチャ頭の良い探偵も甘い物をたくさん摂っていた。

バレンタインもチョコでは無く他のものを貰う事が多い。
チョコを貰うよりもそっちの方が嬉しかったけど。

というわけで俺はあまり乗り気ではない。

「翼、まだか？ 適当に決めちゃえよ。」

「お前・・・せつかくのスキーだぞ？ 楽しもうぜ。」

別にお菓子タイムだけで楽しむのではないと思う。

第一にこの行事のメインは「スキー」だ。
スキーを楽しめば問題ないと思うのだが・・・。

「俺はスキーを楽しむからいいの。さ、そろそろ行こ？」

「ちょ、おい！ 待てって！」

俺が早めに持っていたカゴをレジへと持っていくと慌てて追いかけてきた。

「竜二せっかちすぎるって。もう少し落ち着けよー。」

いつも俺は落ち着いているつもりだけど。
返す言葉もなかったのでほっといた。

さっさと会計を済ますと店の外へと出た。

「明日起きられないかも・・・。」
俺がふと呟く。

明日の集合時刻は5：00だ。
早すぎる。

「遅れたら置いていかれるな。」

翼に軽く鼻で笑われた。

「うるせえなー。遅れないように頑張るから平気だつて。」
適当にあしらっておいた。

「じゃあ、遅刻するなよ?」

「わかってるつて。」

「じゃあな〜！」

俺たちはそう言って家に帰る。

このスキーでどうなるのかも知らずに・・・。

第十九話：待ってましたよ春スキー。（後書き）

県大会編に突入と書きましたがこの行事の事がすっかり抜けていました（汗

それと更新遅れてすみません。

春スキーはどうなってしまうのでしょうか・・・？

第二十話：出発当日

次の日の朝。

まだ完全に夜は明けていない。
少し薄暗い中、重そうにボストンバックを肩に背負い学校へと向かう。

なんとか寝坊せずに起きる事が出来た。

携帯のアラームをMAXにして起きたら姉貴に怒られた。

既に学校の敷地内にバスは停まっていた。

キョロキョロと辺りを見回す。

（いた。あれだ。）

翼たちを見つけ声をかける。

「よお。」

「あ、竜二。うつす。」
翼も眠たそうだ。

「竜二おはよ！」
筒井の後ろから香織がひょこつと顔を出した。

この二人の前でなら名前で呼び合っても平気。

「慣れ」というものは恐ろしいものだ。

「先輩、おはよー。」
筒井も眠たそう。

ちなみにこれだけ面識があつて敬語、というのも堅苦しいのでタメ口で話すように言った。
そしたら喜んでタメ口で話すようになった。

「バスに荷物を入れろ。出発するぞ。」

担任の掛け声が聞こえた。

そういえばいれるのを忘れてた。

よくよく見たら三人とも荷物を持っていないではないか。

「あらら・・・じゃ、私たちのバスあつちだから！ 後でね！」

焦って自分達のバスに乗り、座席に荷物を降ろす。
翼も座席に着いたようだ。

「もう少し経ったらスキー場へと向かいます。基本的にはそれまで自由ですが立ち歩かないように、窓から手や顔を出さないようにお願いします。」

バスガイドがお馴染みの諸注意をアナウンスする。

「朝からラブラブでうらやましいですねえ。」

そう冷やかしてきたのは向かいの座席に座っている牧野尚也。
まきのなおや

「うつせえな。黙ってるよ。」
ふざけた感じで適当に流す。

こいつは所謂クラスのお調子者。
どのクラスにも一人はいる何かと騒ぐ奴。
正直に言つと五月蠅いサッカー馬鹿。
まあ、憎めないキャラだからいいんだけど。

「でもよー。あの子、やっぱり可愛いよなー。なんで竜二なんだろ？」

前の席から身を乗り出して会話に入ってくる人物が一人。

こいつは栢山修^{かやましゅういち}。

何でもズバズバと言う毒舌。

そのせいで色んな人と口論しているのを見かける。
それも熱くなつて暴言を吐くのではなく、論理的に。

こいつと口げんかをして勝った例が無い。
口がよく回るからかバスケット部の部長も務めている。

「お前も！なんで朝からこんな話題なんだよ。・・確かに可愛いけど。」

最後の部分をボソボソつと聞こえないようにつぶやいた。

が、それは見事に聞こえてしまっていた。

「本音が出ちゃいましたね。」

栢山が目を細めてニヤつく。

「先輩・・・！ 笹山・・・！ ああ！！」

牧野が一人で抱き合っている真似をする。

「ちょ・・おい！ やめろよ！！」

俺が牧野を止めようとした瞬間
…

ドカツ！

牧野の顔に黒いボストンバックがめり込む。

「いつてえええ!!」

ジタバタと騒ぎ通路にのた打ち回る。

「あんた邪魔! 朝っぱらからうるさいわね。」

ボストンバックをめり込ませた犯人は新藤瑞穂^{しんとつみすほ}だった。

「新藤ナイスツッコミ! サンキュー!」

俺は牧野の姿に爆笑しつつお礼を言う。

実はこの二人、幼馴染。

クラスでは牧野が馬鹿な事をやって新藤がバシッと一発かます、と
いうのは日常茶飯事。

「じゃあ、そろそろ出発するから席に着けー。」

担任がそう指示するとみんな渋々自分の席へと戻る。

「ではこれよりスキー場へと出発いたします。」

バスガイドが再度アナウンスをするとバスは動き出した。

第二十話：出発当日（後書き）

少し登場人物がゴチャゴチャしてきたので、次は少し整理して書きたいと思います。

特別篇：登場人物紹介（前書き）

先に前までの話を読んでから改めてここを読む事をオススメします。

特別篇：登場人物紹介

登場人物紹介

斉藤竜二：

主人公。この小説の語り手的な役目。

陸上部の部長をしていて昔から物事を断れない二年生。

400mで市大会を勝ち抜き現在、県大会に向けて練習中。

恋愛経験0。

最初は自分が笹山香織の事が好きなのかどうかすらわからなかった。
好きな人を前にすると俯いてしまい顔をろくにあわせる事が出来なくなってしまう。

その笹山に告白する事が出来て現在交際中。

片桐翼：

翼の親友で陸上部の副部長の二年生。

100mで市大会を勝ち抜き、同じく皆と練習中。

メガネが特徴的でガリ勉に見えるが本当は結構なおちゃらけキャラ。

この小説の第二の主人公と言っても過言ではないかもしれない。

現在、筒井綾香と交際中。

彼女のためならなんでもしてしまいそうなほどにデレデレ。

笹山香織：

この小説のヒロイン役で陸上部の部員で一年生。
200mで市大会を勝ち抜き、同じく皆と練習中。

セミロングの髪型をきっちり結んでいてちょこちょことしたニキビが可愛い。

明るい性格だがなんでも重く受け止めてしまいがち。
竜二と同じく好きな人の前では顔を赤らめてしまう。

最初はそのような素振りは見せなかったが遊園地の一件があつてから竜二と急接近。

入部当時から竜二に想いを寄せていた。

市大会終了後に竜二に告白され、めでたく交際中。

筒井綾香：

サブヒロイン的な存在。

陸上部の一年生。

200mで市大会を勝ち抜き、同じく皆と練習中。

竜二と笹山にサプライズパーティを仕掛けたり二人をくっつけようと仕向けたりするかなりのイタズラ好き。

現在、片桐翼と交際中。

髪型は笹山より長めでつぶらな瞳が印象的。

この瞳で翼を魅了しているらしい。

三月廉太郎：

陸上部の一年生。

リレーメンバーの一人。

外見は「チャラ男」

天性の才能を持っておりスタートダッシュがかなり速い。
そのため一走に一年生なのに任命される。

笹山に告白してフラれた。

日高怜：

陸上部の一年生。

少し暗い印象が強い。

ずば抜けて目立つのではなく、縁の下の力持ち。

何度失敗しても黙々と練習する。

リレーメンバーの一人で四走。

加速走をやらせたら竜二や翼でも追いつけないほどの加速力を持つ。

姉貴：『ちいとうあや子 斉藤彩子』

竜二の姉であり竜二の良き理解者。

弟からの相談を親身に聞いてくれる。

そのため、竜二からもかなり信頼している。

竜二をサポートしてくれる大事な役目。

牧野尚也：

竜二と翼のクラスメート。

どのクラスにも一人は必ずいる「お調子者」。
新藤瑞穂と幼馴染である。

栢山修一：

同じく竜二たちのクラスメート。
かなりの毒舌で有名。
論理的に口論する姿がよく見られる。

その論理的思考をかわれてかバスケット部の部長を務める。

新藤瑞穂：

同じく竜二たちのクラスメート。
牧野尚也とは幼馴染である。
気が強い方で牧野に強烈なツツコミを入れる場面が多い。

これからの鍵になる人物かも・・・？

以上が主要な登場人物です。

わからなくなつた時に参考になれば幸いです。

わからなくなるような書き方にならなければ一番良いのですが・・・
^^ ;

第二十一話：ドタバタスキーの幕開け

「・・・よっ・・・ろよっ！」

「起きろよっ！」

翼に顔を強めに叩かれて意識が戻る。

いつの間にか寝ていたようだ。

叩かれた方の頬が痛い。

「竜二、お菓子タイム終わっちゃったぞ？ 楽しかったな。」
翼が牧野と栢山に問いかけると二人同時に頷く。

「そうそう！ 竜二ったら何度起こしても全っ然起きないんだもん！」

どうやら栢山が起こそうとしてくれたらしい。

そんなに寝起きが良かったら何回も遅刻したりしない。

まだ頭がはつきりしない中、突然頭上から声がした。

「もうそろそろスキー場に着くっぽいよ？」

「うおっ！！」

俺も隣に座っている翼も驚いた。

真上から見下ろすように新藤がいるではないか。

「何そんな驚いてんの？　ずっといたじゃない。」
まったく覚えていない。

というかいきなり顔が上から出てきたら誰でも驚くだろう。

そんなやりとりをしているうちにスキー場へと到着した。

周りはほとんどが雪を被っていて真っ白。

これが所謂「銀世界」なのだろう。

担任からインストラクターの先生の紹介をされるとそれぞれ班ごとに分かれた。

この行事は一・二年生の交流も趣旨に入っているため一年も二年もごちゃ混ぜだ。

（えーっと、俺の班は・・・。）

男子は俺と牧野と栢山と翼。

さっきとまったく同じ面子だ。

女子は・・・。

新藤に筒井に香織。それに同じクラスの天野。

天野は新藤と仲がいろいろいい。

まったく話した事は無いけど・・・。

突っ込みどころ満載の面子である。

ここまで揃いすぎると逆に怖い。

まあ、とりあえず脅威の幸運に感謝した。

さすがの翼たちでもこんな時までくっついてたりはしないだろうと思っただけが・・・

気づいた時にはもう二人でキャツキャと騒いでました。

見てるこっちの方が恥ずかしくなるくらいに。

そんな翼たちに冷やかな目線を送りつつインストラクターの話を聞いていた。

というか聞いてないと絶対に転ぶ。
俺はスキーはまったくの素人。

一通り説明が終わり、さっそく滑る事に。

ズテン。

・・・こけた。

いきなりズテツと。

しかも香織の目の前で。

みんなに笑われてしまった。

翼や牧野なんて笑いすぎだろってほど笑ってる。

香織も笑っている。

激しい自己嫌悪が襲ってきた。

このまま端っこでいじけていたい。

今の俺はどす黒いオーラを纏っているに違いない。

「ほらっ、つかまって?」

香織が笑いながらも手を差し伸べてくれた。

情けなさとしずかしさでなんともやり切れない気持ちになる。

「う、ごめん・・・。」

香織の手につかまってようやく立ち上がった。
その瞬間。

ふざけた牧野が調子に乗って俺の背中を押した。
押した先は斜面。

香織が斜面を背にして立っている。

「ちょ! お、ば、馬鹿! わわわわ!」
俺のスキー板は言う事を聞かずに滑る。

「きゃ! りゅ、竜二! 危ない!」

と香織が叫んだ瞬間

：

ボタン！

なす術も無く二人とも後ろに倒れてしまった。

「痛たたた・・・。」

「痛つてえ・・・。」

二人とも呻くように声を上げる。

とつさに香織を庇って受身をとっていたらしい。

俺が下になっている。

あのまま倒れていたら香織が俺の下敷きになっていただろう。

体育の受身を真面目にやっていてよかったと思う。

瞑っていた目をゆっくりと開けた。

「!!!!!!」

目の前に香織がいるではないか。
まあ、当たり前的事实だけど。

でも目と目の近さ、10cmもない。
漫画みたいな感じ。

心臓がドキドキしているのが聞こえてしまいそう。

というか・・・。

もう少し勢いが強かったら唇が当たっていたと思う。

しかもひっくり返すように受身を取ったから俺の手は香織の背中に。
わかりにくいと思うが簡単に言えば抱き合う感じ。

転んだ恥ずかしさとかこんなシチュエーションになっちゃった恥ずかしさでそのまま消えてしまいたく思った。

「・・・」

みんな啞然としている。

真っ白になった頭がようやく戻り抱いていた手を離す。

「い、ごめん・・・怪我、してないか？」

「うん・・・平気だよ。」

ゆっくりと立ち上がった。

「バカ尚也！！ 怪我してたらどーすんのよ？！」

新藤が思いつき怒鳴る。

「・・・悪い。ごめんな。」

この大馬鹿もようやく状況を察知したか。

「あ、だいじょ・・・」もう少し考えなさいよ！ 二人とも県大控えてるんだよ？！」

俺が意思表示をしようとしたら思いっきりさえぎられてしまった。

「ホントごめん。でもよ、なんでお前にそこまで言われなといけないんだよ！」

「だってこれで怪我してたら尚也、どうなってたかわかってるの？！」

「うつせえな！ だからさつきからずっと謝ってるじゃねえかよ！

！ 大体お前は幼稚園の時から ……」

こっちはこっちで痴話喧嘩が始まってるし。

「まあまあ。落ち着けて。俺も、香・・・笹山も大丈夫だからさ。」いつものクセで名前で呼びそうになった。

言い争いを続ける二人の間に入ろうとする。

「私も大丈夫ですから・・喧嘩はやめましょ？」
香織を体勢を立て直して仲裁に入る。
が、二人とも聞く耳を持たず。

翼と筒井は俺と香織を気遣ってからはこの二人の事はまったく気に
してないし・・。

天野は天野であたふたしてるだけ。

もうほっとこう・・。

いきなり波乱万丈だがこうしてドタバタの3日間が始まった。

本当にこんな調子で大丈夫なのだろうか・・・？

第二十一話：ドタバタスキーの幕開け（後書き）

更新間隔が空き過ぎてごめんなさい。

卒業式やら何やらで結構忙しかったです（汗

言い訳にしか聞こえないかもしれませんが^^；

第二十二話：到着

「つ・・疲れた。」

体のあちこちが痛い。

あれから二時間ほどスキーの講習があった。

何回こけたのだろう。

多分班の中で一番こけたと思う。

その度にみんなに笑われた。

しかも転んでる時に写真まで撮られたし。

散々な目にあった。

これが後、二日間も続くのか。

なんだか憂鬱になってくる。

スキー場から宿舎に着くまでの間そんな事を考えていた。

バスはどんどん山の奥へと入っていく。

くねくねと曲りくねった道ばかりあるので酔いそうになった。

ようやく宿舎に到着。

結構大きな宿舎である。

そりゃ三年生以外の生徒全員が泊まるのだから広くないとダメだが。

担任がまた何か叫んでいる。

「今から部屋のを説明するから責任者は取りに来いよ！」

そつえば事前に班を決めてたつけ。

俺らの部屋の班は俺・翼・牧野・栢山・日高・三月の六人。

またこの面子かと思うともう笑うしかない。

確か責任者は翼。

たまにはやるか、と思い責任者に立候補したが朝寝坊しそうだからと言われ満場一致で同じく立候補していた翼に決定。

そんなに俺ってだらしないか？

「あ、俺らの班の部屋決まったから。」
担任の元から翼が戻ってきた。

「俺らはここ。藤の間。」

宿舎の案内図を見つけ、一番角の部屋を指差す。

「やった！ 一番端じゃん！ 先生達あんまり来ない！」
牧野と三月が騒ぐ。

この二人はどうやら馬が合うらしい。
ほとんど会話などした事が無いはずなのに早くも打ち解けている。

まあ、類は友を呼ぶとか言っしな。

「あんまり簡単に考えない方が良さそうよ。端と違って結構先生達も目、付けるって言われるし。」

栢山がすかさず厳しい突っ込みを入れた。

こいつは言いたい事をズバズバと言ってくれるから結構気分が良い。
言われる側になるとイラっとくる時もあるけど。

「まあまあ。来ないに越した事は無いんだからさ。気楽に行こう?」
翼が栢山を諭すように言う。

「そうっすよ! 片桐先輩ナイス!」
三月もそれに同調する。

栢山もいつもどおり反論してくるかと思ったがやはり頭の回転が速い。

この二人と争っても無駄だとわかり不貞腐れているだけだった。

「とりあえず荷物、部屋に置きませんか?」
ずっと黙っていた日高が皆に提案をした。

確かにその通りだ。

辺りを見るともう他の班はそれぞれの部屋へと散らばっている。

俺たちも部屋に向かう事にした。

「はあー・・・疲れた・・・」
全員荷物を無造作に下ろす。

12畳くらいの部屋に押入れとベランダに出る窓が一つずつ。

入り口の所にトイレは一応あった。

「夕飯は風呂の後。それまでは自由時間で良いってさ。
ニクラスずつ入るが時間がかかる。」

「じゃあ、トランプでもやる！ 俺、きちんと持ってきたから！」
牧野がガサゴソと自分の鞆を漁る。

鞆の中身が一瞬だけ見えたが遊ぶ物ばかりだった。

こいつの頭の中には遊ぶ事しかないのだろうか？

そして俺たちは定番である「大富豪」をやる事になった。

もちろん罰ゲーム付きで。

第二十二話：到着（後書き）

罰ゲームをどんなのにするか思案中です（笑）

定番の罰になっちゃうかもしれませんが^^；
無い頭を振り絞って考えてみます。

第二十三話：キッツい罰ゲーム（前書き）

「大富豪」というのはトランプのカードゲームの事です。

ジョーカーが一番強く、順番に2、1、13・・・3
となっています。

同じカードを二枚・三枚と同時に出す事も可能。

ちなみに「8切り」「スペ3」「革命」はローカルルールなので無い所もあると思います。

8切り・・・8を出すとそのまま切る事ができ、新たにカードを出せる。

スペ3・・・ジョーカーが出た場合、スペードの3を出せばジョーカーを切る事が出来る。
（スペ3は無しにしてありますが）

革命・・・3を4枚だとか同じカードを4枚一気に出すと革命となりカードの強さがすべて逆転する。

第二十三話：キッツい罰ゲーム

目の前に次々とカードが出されていく。

もうすぐ上がる人が出てきても良い頃だ。

「はい。」

日高が出したのは『12』だ。

「あ！ てめっ！ 12とか大きすぎるゝ・・・。パス。」
翼が自分の手札と睨めっこしながら前に出されたカードにいちやもんをつける。

「そりゃナイってゝ。パス。」

三月も頭をグシャグシャと掻きながら嘆く。

俺の番だ。

ここは一気に賭けに出てしまおう。

一位になれば罰ゲームは思いのまま。

自分の中に秘めていたSの部分に気がついた瞬間であった。

「いけっ！」

そう言って俺が出したカードは『2』。

このゲームにおいて一番強いカードだ。

ちなみにこのカードを切られたらお仕舞いである。
なぜなら残り一枚となった手札のカードはこのゲームで一番弱い『3』だからだ。

一瞬、場がしらけた
なんだこの空気は？

みんながお前、空気読めよーとも言いたげな目をしている。

誰もが俺の方をジトーっとした目線で見つめてくる。

俺、何か悪い事したか？！

そのひんやりとした空気を打ち砕いたのはやはりこいつであった。

「やった〜！ ジョーカー！！！」

牧野が高らかに叫ぶ。

「・・・あああゝ！！！！！」

このカードの存在をすっかり忘れていた。

大富豪において『2』は最強を誇るがジョーカーには勝てないのだ。

さてよ。

という事は・・・？

残った手持ちのカードは最弱である『3』だ。

「負けたああ！！！」

罰ゲーム決定の瞬間だった。
途轍もない敗北感に襲われる。

まだ『革命』という可能性もあるがそんな可能性は無いに等しい。

こうなったら日高が一位になってくれる事を祈るしかない。
日高ならキツイ罰ゲームはしなさそうな気がする。

「よっしゃー！ 牧野ナイス！！」

「牧野、よくやった！」

「先輩ありがとうございます！！」

みんな口々に歓喜の言葉を発する。

日高、頑張ってくれ
……！！

それから2、3分経っただろうか。

「よしっ！ 上がり！」

上がったのは栢山であった。

最悪だ。

こいつはドSである事でも有名。

罰ゲームを決める役なんてやらしたら何をやらされるかわからない。

栢山が上がってからみんな上がっていった。

「さあ。罰ゲームは何にしようかな。」

不気味に微笑む栢山の姿は悪魔か何かだと心底思った。

思わず俺は息を呑む。

「じゃあ、さっきのロビーの真ん中で『香織く！好きだく！』って

言つて。一回。」

「お、おい！」

「ああ、もちろん大声で。みんなこの部屋にいるから聞こえなかったらやり直しね。」

「馬鹿！ 他の人に迷惑になるだろ！」

まったくこの悪魔は何を言い出すんだ。

「いやいや。この宿舍、うちの学校しかいないから平気だよ。女子は上だし。」

黙り込むしかなかった。

そういう問題じゃなくて！ とか突っ込めばよかったのだろうがこいつに何を言つても無駄だ。

なんでこいつが一番になつてしまったのだろう。

なんで俺は馬鹿な賭けに出てしまったのだろう。

すべてを恨めしく思い、ロビーへとトボトボ向かう。
他の5人の熱い視線を受けながら。

まともだと思っていた日高もいつの間にかみんなに感化されてしまっている。

まずは辺りをキョロキョロと見回す。

幸いホテルでは無かったためフロントのようなものは無い。

・・ロビーには誰もいない。
もう覚悟を決めよう。

「香織いゝ！！！！ 好きだー！！！！」

思い切り叫ぶ。

恥ずかしくて死にそう。

部屋の方角を見ると栢山が人差し指を突き立て口パクで「もう一回」と言ってくる。

あいつ、本当に正気か？

「香織っ！！！！好きだー！！！！」

言い終わるとダッシュで部屋に駆け込む。

今ので辺りはざわついている。

みんな犯人は誰か、とキョロキョロとしている。
もちろん爆笑している者が多数。

そんな好奇心旺盛な目で探さないでくれ、と願うばかりだった。

そんな騒ぎを聞きつけた担任や他の先生がロビーに来たようだ。

無事に部屋に戻る事が出来た俺は肩で息をする。
呼吸が無性に荒い。

「はぁ・・・はぁ・・・お前、本当にこんな事させやがって・・・」

全員爆笑している。

牧野と翼なんてスキー場で転んだときよりも笑っている。

ずっと腹いてーだとか喚いている。

こっちの気も知らないで。

この二人は俺がどれだけ恥ずかしい思いをしたかわかっているのだろうか。

多分わかっていないであろう。

と、そのとき。

バタバタッ！ バタンッ！

勢い良くドアが開かれた。

「今、馬鹿な事をした奴は誰だ？！」

学年主任の先生が鬼のような形相で怒鳴っている。
この事件の発端がバレたらどうなるかわからない。

「俺たちはここですつと荷物整理をしてただけですよ？ そしたらさっきの声が聞こえて……。この馬鹿が荷物を全部ひっくり返しちやったんですよ。」

栢山が機転をきかせていけしゃあしゃあと在りもしない嘘をつく。この馬鹿が、という所を強調して牧野の頭をぺしぺしと叩く。

いきなりそんな事をされて不服そうだったが状況が状況だったので黙っていた。

こんなときに頭が回る奴は羨ましい。

トランプは片付けてあり、荷物が牧野のおかげでグチャグチャだった事が功を奏した。

「そうか、悪かったな。」

一言だけ言い残して先生は去っていった。

5秒ほどの沈黙

「あー！ びっくりした！ 栢山もよくあんな事を簡単に……。翼の口から安堵の息が漏れる。」

「栢山先輩、流石ですね！ すごいです！」

いつもは無口な日高もようやく慣れてきたようだ。

「ひでえなあー。俺を悪役に仕立て上げちゃってさー。」

牧野だけがブーイングをしている。

そりゃ、あんな役をいきなり押し付けられたら誰だって文句を言うだろう。

「まあ、切り抜けられたからいいじゃないですか！ 先輩の罰ゲームも面白かったですし！」

三月は思い出し笑いを堪えているのがバレバレである。
まったく酷い後輩だ。

「とりあえずよー。さっさと片付けて風呂行かねえ？」
またさっきの事で爆笑されそうだったので話を逸らす。

「そうだな。また学年主任に怒鳴られるのもアレだし。」
この状況で翼がフォローしてくれた。
地獄に仏とはこの事だろう。

「よしっ！ 決まり！ 行こう！！」

俺たちはまず散らばった荷物を片付ける事に。

それから風呂だ。

何事も無く終われば良いけど・・・。

第二十三話：キッツい罰ゲーム（後書き）

罰ゲームも案外普通のものになってしまったかと思います（汗

栢山のドSっぷりが合間見えたかと^^；

更新間隔が空いてしまい、申し訳ありませんでした。

評価・コメントも増えて嬉しかったです^^

第二十四話：待ちに待った消灯時間！

風呂も夕飯も特に大きな出来事もなく終わった。

相変わらず牧野はうるさかったけど。

まあ、たまにはいいだろう。

香織たちも香織たちで楽しくやってるみたいだし。

いよいよ消灯時間。

林間学校や修学旅行と言ったらこれからが楽しみの一つだろう。

布団を敷き、とりあえず寝る準備は終わった。

先生達に怒られないための建前でしかない。

「何する？ 何する？」

ワクワクした目でみんなに呼びかけるのはやはり牧野だった。

「あ、悪い。ちょっとメールチェック。」

徐に鞆から携帯を取り出す翼。
もちろん許されているはずがない。

まあ、俺たちの間では「暗黙の了解」みたいになっちゃってる。
本当はよくない雰囲気なんだけどね。

とか言いながらちゃっかり俺も持ってきてるから人の事はいえない。

少しの間みんなでメールチェック。

「なんだよなんだよ。みんなして携帯いじっちゃってさー。」

持ってきていない牧野が不貞腐れて拗ねている。
本来ならばこいつが正しいのだけど。

俺もなんだかんだ言っでメールチェック。

香織から一件。

業者メールが一件来ていた。

「さっきの声、竜二?! びっくりしたー。罰ゲームか何かだろうけどもうやめてよね!? ずーっと冷やかされっぱなしだったんだからー……。」

やはり聞こえていたらしい。

・・しかもちよっと怒り気味だ。

そりゃあんな事されれば誰だって怒る。

丁寧に謝罪の言葉を入れて返事をしておいた。

全員メールチェックは終わった。

「よしっ！ 何するー？」

端っこで拗ねていた牧野が途端に元気になる。

「こういう時はやっぱり恋バナっしょー。」

今度は翼がハイテンションになる。
また彼女自慢に発展するのだろうか。

「でもさー、翼と竜二は聞いても面白くない？ みんな知ってるんだし。」

栢山が思いつき突っ込む。

こいつは悪気があってやっているのだろうか？
しかも俺も翼と同レベル扱いだし。

俺はあいつほど彼女自慢はしていない！・・・はず。

「まあまあ。気にせずにやろ！」

牧野は早く騒ぎたいようだ。

うずうずしているのが目に見える。

「じゃんけんで負けた奴からな？　じゃーんけーん・・・」

「ポンッ！」

負けたのは・・・。

「やった〜！　竜二の負け〜！」

大袈裟すぎるだろ、と突っ込みを入れなくなるほど牧野は騒ぐ。
というかこいつに「恋愛」の二文字はあるのだろうか？

「じゃあお惚気話してもらおうか。」

翼と栢山はニヤニヤとしてこっちを見ている。

「先輩！　期待してますよ！」

日高と三月も興味津々のようだ。

また俺か・・・。

全員パーを出していて俺だけグー。

一人負けというのはとても惨めで無様だと改めて思い知った。

「大体、何を話せばいいんだよ・・・。」

一人でぶつぶつと呟く。

「じゃあ、俺たちが色々と質問するから答えればいいよ。」

またしてもあの「悪魔」が不気味な笑みを浮かべている。

「何を質問させてもらおうかなー・・・？」

どうやらここには眼鏡で本性を隠した「鬼」もいるようだ。

ホント勘弁してくれよ …

同日：就寝準備中：二階・女子部屋

「嘘っ?! さっきの本当に斉藤だったの?!」

同じ部屋の新藤先輩が驚く。

「はい・・・今さっき返事が来て謝ってきました・・・」

私も相当驚いた。

だって竜二がいきなりあんな事言うとは思わなかったし・・・。

「香織」なんてよくある名前だから他の人だと思ったのに。

「ほらっ! やっぱ先輩だったじゃん! 二人とも仲良いねえ!」
! このっこのっ!」

さつきから綾香はずーっとニヤニヤしたまんま。

綾香に冷やかされて私は顔から火が出るほど恥ずかしかった。

帰ったら竜二に思いつきりばかって言つてやるゝ・・・。

「でも・・・ちょっと羨ましいかも・・・。」

天野先輩が新藤先輩の後ろで微笑む。

ちなみに私たちの部屋は私・綾香・新藤先輩・天野先輩の四人。女子は人数が少ないから一部屋ごとの人数が少ないんだっけ。

優しくて話しやすい先輩でよかった。

一年生同士・二年生同士を決める時は自由だった。

けど一年生と二年生をくつつける時になるとくじ引きになる。

二年生のちょっとギャル系の人とか苦手だもん・・・。

「あ、そうそう。新藤先輩って堅苦しいから瑞穂でいいよ。タメ語もOK。唯ゆいもいいよね？」

「うん。その方がいいかも・・・。」

いきなり先輩を名前で呼ぶって・・・。
しかもタメ語って。

竜二と片桐先輩はちよつと特別だけど。

「はい！　じゃあ瑞穂に唯。改めてよろしく！」

綾香の順応性が物凄く羨ましい。
でも合わせなきゃ。

「よしっ！　こちらこそよろしくっ！」

「よろしくね。」

新藤せ・・・じゃなくて瑞穂と唯が大きく頷く。

布団も敷き終わつたし後は消灯。
もちろん起きてると思うけど。

「何を話そっか？」

みんなで布団に寝そべりながら綾香が問いかける。

「やっぱ恋バナっしょ！　二人の話聞きたいし。」
そう提案したのは瑞穂だ。

けどこういつ時ってやっぱ恋バナか怖い話だよね。

・・怖いのは苦手だけど。

遊園地ですごい事になっちゃったし。

あの時は偶然竜二の手を握っちゃって、頭真っ白になっちゃって・・。

思い切って「握ってていい？」って聞いたらOKしてくれて、
すっごく恥ずかしかったけど本当に嬉しかった。

竜二のあったかくて大きな手を握っていると安心出来たもん。

「香織っ？ どうしたの？」

いつの間にかボーっとしてたみたい。

「ごめん、ちょっと考え事してた。」

適当に言い訳しておかないとまたからわれちゃう。

「そっかあ。じゃあ恋バナしよ！」

今回は綾香を誤魔化す事が出来た。

綾香、鋭いからいつつも竜二の事考えてるとばれちゃうんだよね。

「誰から始める？ たまには唯から？」

「えっ？ 私から??」

明らかに動揺してる。

恋してるんだ。

なんか後輩の私が言うのも変だけど、可愛い。

「いやいや、ここは言いだしっぺの瑞穂からでしょー!」
綾香がさっき私に向けたニヤニヤを瑞穂に向ける。

「もう！ しょうがないなあ……。内緒だよ？」

「はい!」

こうして私たちは恋バナをする事になった。

・・・瑞穂と唯の恋バナ、ちょっと楽しみだな。

第二十四話：待ちに待った消灯時間！（後書き）

悪い子の集団でごめんなさい^^；

初めて香織視点で書いたと思います。

なので可笑しな点多々あるかと（汗

少しの間竜二と香織の視点を分けて書きます。

次は瑞穂の恋バナから・・・。

第二十五話：悲しげな瞳

「で、何を言えればいいの？」

観念しました、とでも言いたげな顔をしながら瑞穂は頂垂れている。

「うーん・・・じゃあ、好きな人いる？」

綾香がストレートに聞く。

まあ、恋バナといったらまずはこれでしょ。
瑞穂の好きな人、結構気になるし。

「・・・いる。」

私は綾香と嬉しそうに笑う。

瑞穂って印象としてサバサバした性格で男子なんて！ってキャラに見える。

だから余計に気になってたんだけどね。

「私もそれ、初めて聞いた・・・。」

唯も驚きの表情を隠せないでいる。

この二人って普段恋バナとかしないのかな？
私たちはほぼ日常的にしてる気もするけど・・・。

「あんまりこういう話はしないからねー。」

「で、誰？誰？」

綾香が瑞穂に問いかけると少しの間、黙ってしまった。
私も綾香も唯も興味津々になっている。

「……………尚也。な、内緒だよっ?！」

慌てて口止めをしている。

尚也……………?

誰だっけ。

「えっと……尚也って、牧野の事?」

唯が確かめるように聞く。

「……………うん。」

牧野ってあの牧野先輩?

竜二がよくうるさいうるさいって言うてる……………。
あんまし面識無いけど。

スキーの班で一緒だったっけ。

「そうだったんだあ……。」

唯が目を見開いて納得している。
けどなんかピンと来ない。

綾香も哑然としてるだけだし……。

「わ、悪かったね！ 面白くなって！」

反応が微妙だったからか瑞穂は拗ねてしまった。

なんと声をかけたらいいかわからずにまた沈黙が続く。

「……幼馴染なの。」

急に瑞穂が話し始めた。

「昔からあいつ馬鹿ばっかしやっててね。いっつも私、からかわれてた。でもね、小学校の頃に私、いじめられてた時があつて。その時にいきなり『こいついじめてる奴は俺が許さない！』って言うて

主犯格の子に殴りかかっていったの。今度は自分がいじめられるかも知れないのにね。そしたらあいつ、『俺が守ってあげるから』って。」

瑞穂の顔はどこか悲しげで寂しい感じがした。

「馬鹿だよな。臭い台詞言ってカッコつけちゃってさ。でもあの時のあいつ、すっごく頼もしかった。・・・結構カッコよかったし。ホントよくある話だけどね・・・。」

全部話し終わると瑞穂は一息ついた。

なんでこんなに悲しい顔をしてるんだろう・・・？
どうしてこんなに寂しそうなんだろう・・・？

自然とみんな悲しい空気に包まれていく。

私はそんな中、閉ざしていた口を開いた。

「いい話だね・・・でもどうして瑞穂はそんなに悲しそうなの・・・？」

唯も綾香も軽く頷く。

「・・・あいつ、好きな人いるんだってさ。」

ははは、と瑞穂は軽く笑っている。

「前に聞いたの。そしたら『ずっと好きな人がいる』って。」

・・・それって。

それってもしかして。

「ま、牧野先輩、他には何か言ってなかったの？」

今度は綾香が尋ねる。

「えっとね、『めっちゃ可愛くてモテそうだから絶対に振り向いて貰えなさそう』って言ってた。」

やっぱり。

牧野先輩も瑞穂の事が好きなんだ。

瑞穂、すっごく可愛くてモテそうだもん。

スラッとしてるし顔もすっきりしてて私みたいにニキビとか無いし。和服が似合いそうで清楚な感じ。

それに「ずっと」好きな人なんだから・・・ね？

幼馴染である瑞穂が確立高いでしょ。

瑞穂、鈍感なのかな。

「それって向こうも瑞穂の事、好きなんじゃないの？」

三人同時に同じことを言った。
やっぱりそう思うよね？

「そ、そんなわけ・・・！ 私なんか・・・」

顔を赤くして首を思いつきり振っている。

「瑞穂、もうちょっと自信持ちなよ！ 可愛いんだからさ！」

しよぼんとしている瑞穂を私は慰める。
というか、瑞穂が可愛くなかったら私なんて・・・。
人の事まったく言えないけど。

「・・・ありがと。ちょっと自信ついた。」

照れるように笑う。
この笑顔、うらやましいな。

「じゃあ、次は誰行く?!」

私たちの恋バナはまだまだ続くのであった

⋮

第二十五話：悲しげな瞳（後書き）

更新間隔空きすぎました（汗

これからはもう少し更新できるようにします。

アイデア不足をどうかしないと^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5685d/>

不器用な俺。

2010年11月14日09時21分発行